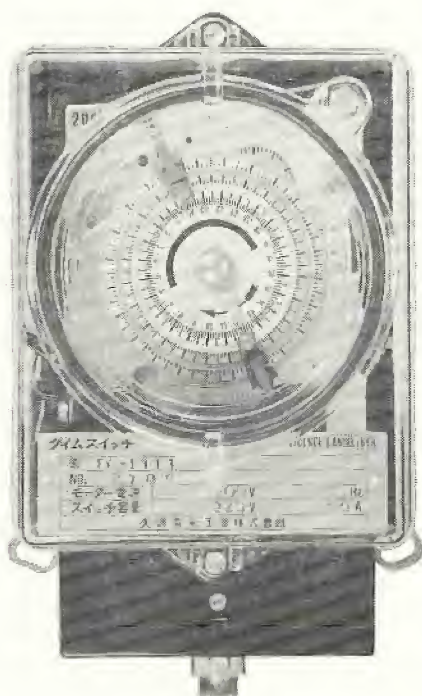
Osaki

★節電時代のエース★

大崎の タイムスイッチ



上手なコンビネーションで，予想以上の節電が可能です。

日間・週間・年間の自動定時入切はもちろん，独自のソーラーダイヤルによる日没・日の出時刻の照度に合わせた入切の季節自動修正装置付です。

工場でもオフィスでも，電力・電灯を問わず，出勤・退出に合わせ，また季節による日照・日没に従って，全体または部分的にいちいち人手によらず自動的に入切ができます。

信頼度絶大・メンテナンスフリーの大崎のタイムスイッチをこの際，是非御利用下さい。

《特　長》

- 36時間の停電補償付
- 機種が豊富で用途別に選択が可能
- 消費電力が小さい（約２W）
- スイッチ容量が大（30A）
- １台で３回路まで制御が可能

大崎電氣工業株式會社

〒141　東京都品川区東五反田２丁目２－７
電話(03)４４３－７１７１(大代表)

モントリオールへの道

オリンピックでの定着アジア大会への仲間入りそれに、旧来の世界選手権……。しかも、アジア大会を除いては、いずれもアジア予選必至という情勢は、日本協会の強化対策を、息つくひまもないほど、追いまくりそうである。

現在でも、日本協会の頂点対策の焦点が、いったいどこにしぼられているのか判らない、といった声があり、このままだと、いっそうその混乱が強まると思う。

日本の気質といおうか、特色といおうか、世界選手権よりもオリンピックに比重が置かれる風潮は、ハンドボール界も例外ではないようだが、それならそれで、4年なり、5年なりを1サイクルにした「長期計画」が確立されねばなるまい。

モントリオールを通りこしてモスクワ・オリンピック（一九八〇）に照準を当てるのなら、モントリオールや、一九七八年の世界選手権の順位・成績について、あまりとやかくいうこともさけねばいけない。

あれもこれも、出る大会々々威勢のよいアドバルーンを上げてばかりいて、実を伴はなければ、外部はもとより、内部の信用も失うことになる。

そこで望みたいのは、ナショナルチームのプロジェクト化とともに、その伝統づくりである。

周囲の理解が高まって、ひところのような、世界選手権のたびに〝単発全日本〟を編成する愚はなくなってきているのだから、あとは、ナショナルチーム自体が、一つのチームとして、先輩の業績を残し、新人の登用、発掘に努めるムードを育成することだ。

また、ナショナルプレイヤー選手諸君は、日本の代表という責任感は旺盛だが、ナショナルチームを「自分たちのチーム」とする自覚が、まだまだ乏しい。

母校や、所属企業のチームに感じる愛着や情熱を、ナショナルチームにも感じて欲しいと思う。

大学や高校で、最上級生たちは卒業の時、必ず後輩に自分たちの果せなかった夢の実現を託して行くハズだ。

それをそのまま全日本に当てはめれば、打ちつづく国際行事を一本の糸で結びつけて、切り開けようし、段階的なトレーニングも効果があがる。ミュンヘンに向けて歩んだ苦難の道が、モントリオールへの道に当然、接続されなければいけないし、それがいつの日か栄光の道になるのである。

市民ハンドボールの芽

このところ、各地でクラブの組織化が目立っている。嬉しい傾向だ。今まで大会が実施されると、きまってその目的は、勝者を決めることにあった。

スポーツを楽しむためのオーガナイズというものはほとんど顧りみられなかったのである。

もちろん、勝負を競い、優劣を争う要素がまるきりなければスポーツ本来の楽しさを味わえぬわけだが、それが過ぎると〝強さ〟のみを追い求める結果になった。

競技団体である日本協会は、ある面それだけでよいとも思うのだが、すべての組織が、これに右へならえ、ではまずい。

えてして、地方協会などは、日本協会の下部組織なのだからという理由（理窟？）で、楽しむ階層へ目を向けることを怠ってきた。

それが近年ようやく〝楽しさを求めるハンドボール界〟への認識が高まり多くの地方協会がその助成に力を入れはじめてきたのは、大いに喜んでよいと思う。

ところで、こう話を進めてくると、そうした面での活動は、地方まかせにして、中央（日本協会）は何もしないつもりか、と口をとがらせるかたも居られるだろうが、卒直のところ、その気持ちが筆者には強い。

仮に、中央が手をつければ、少々形は異るにせよ、やはり、それなりに〝強者の選出〟が頭を持ちあげてくる。

底辺なり、市民ハンドボールなりは、いちばん最寄りの機関が、ごく内輪に育ててこそ意義があるのではなかろうか。

筆者の知っているクラブ組織は、すべて自給自足、つまり、競技（連盟）役員も、レフェリーも仲間からの〝供出〟でまかないそれでなんのトラブルもなく日程を消化している。手づくりの味の楽さしが、そこにはある。

ただ、彼らは上部組織とでもいうべき地方協会のせめてレフェリー講習会ぐらいには出席したい、という。

また、別のある関係者は、きっかけさえ地方協会が作ってくれれば、あとは自分たちでいくらでも運ぶ、という。

市民ハンドボールと、既存組織の接点は、このほか探せばいくらでもありそうだ。

市民ハンドボールの芽をもし枯らしてしまうことがあったらそれはもう、〝中央〟の弁解の余地ない失策であることは充分承知である、（S）

「ハンドボール」

49年12月号（第128号）目次

【表紙写真】 茨城国体・高校女子決勝大阪（選抜）×茨城（水海道二）。大阪のエース池渕（中央）はインターハイにつづき再び優勝の原動力となった。（10月24日・水海道一高・撮影・光島磯雄）

世界選手権（男子）3グループ制に

ＩＨＦ（国際ハンドボール連盟）が、男子世界選手権に、ランキング制（グループ別）採用を決めた。10月のＩＨＦ総会（本誌前号参照）で、懸案のランキング制について全面委託されていた競技・規則委員会（ＣＴＭ）は、ただちに協議を行い、新システムに踏み切ることを決定、各国へ通達した。

ランキング制はワールドチャンピオンを争う「Ａ」のほかに、「Ｂ」「Ｃ」クラスを設けるもので、ＣＴＭの決議にもとずき、行事委員会（ＣＥＯ）は、次のように、今後のスケジュールと開催国を発表した。Ａグループは第9回世界男子選手権である。

◇Ａグループ＝16ケ国。一九七八年（昭53）デンマーク。

◇Ｂグループ＝12ケ国。一九七七年（昭52）オーストリア。

◇Ｃグループ、一九七六年（昭51）イギリス。

各グループへの参加国は、ＩＨＦ加盟63ケ国が現時点ではすべて白紙の立ち場におかれ、モントリオール・オリンピック（昭51）の成績などを基準にして遂次決められる予定。

一九三八年（昭13）以来の現行システムを打破する今回の決定は、日本をはじめ各国に大きな反響を呼んでいる。なお、女子はすべてこれまでどおり。

Ａグループには「アジア代表」も

【解説】ついにＩＨＦが決めた。「ついに……」というのは、このシステムは、一九六二年以降のＩＨＦ総会で毎回かならずどこかの国から提案され、そのたびに却下されていたからだ。

特に、一九七〇年（昭45）のマドリッド総会前には、ＩＨＦ自から、ランキング制支持の意思表示（＝本誌77号参照）さえしたほどだが、この時も実らなかった。

今回の総会では、古くからこのシステムの提唱者であったオーストリアが中心となり働きかけたもので、ＩＨＦ加盟国が60をこえたのが、これまでにない〝説得力〟となったようである。

さて、各グループへの参加国だが、今春の第8回世界選手権（優勝ルーマニア、日本12位）は、いっさい資料とされず、すべて、これからの成績、特に明後年のモントリオールオリンピックを基準にする方向。

とりあえず、ＩＨＦが建てている計画によると、Ａグループ16ケ国は、開催国（デンマーク）のほか、アジア大陸1、アメリカ大陸1、アフリカ大陸1、モントリオールオリンピック上位6ケ国、Ｂグループ上位6ケ国で構成されるようだ。

Ｂ・Ｃグループについては詳らかにされていないが、少くともＢグループ（12ケ国）には、Ｃグループの上位2ケ国が加わると伝えられており、それに開催国（オーストリア）を考えると残り9ケ国は、モントリオールオリンピックがらみで処理されよう。

将来は〝参加国固定〟か

Ｃ－Ｂ－Ａと関連づけられることから、各グループはこの順にしたがって大会を開くわけで、Ｃグループは、オリンピックと同じ、明後年に早くも行われる。加盟間もないイギリスがこのグループを引きうけて、一気にハンドボールの普及を企ろうとする姿勢は注目してよい。

ところで、消息通は、Ａ16、Ｂ12、Ｃ(?)という数字は、あくまで初回だけ。一九七八年のＡグループの成績で、おそらく、Ａ8～12ケ国のメンバーが決められるものとみている。

つまり、今回は、初めての試みだけに、モントリオールの予選と本大会をフルに活用して、全加盟国にＡグループへの参加の道を開いたといえる。

今後は、一九七八年のＡグループの上位国によって、一九八二年のＡグループ参加国が自動的に決められる公算が強い。そうなれば当然、Ａグループのための大陸代表などという特例はなくなる。Ａ－Ｂ、Ｂ－Ｃの入れ替えも行われるようになろう。

日本、Ａグループ定着に全力

日本協会は、ＩＨＦが、このようなランキング制を布くのは、もう少しあと、と踏んでいただけに「予想外」という表情。今回の決定に対する公式的な話し合いは、本誌〆切り（11月20日）までには行われていず、見解も明きらかにされていないが、一九七七年（昭52）に予想されるＡグループのためのアジア予選に全力を傾けることになるだろう。

もちろん、その前に、モントリオールオリンピックでベストシックスに食いこめば、Ａグループへの参加資格を得られるわけで、強化の焦点が、そこに絞られることを期待したい。

日本協会・荒川理事長は「ランキング制が採用されたからには、常にＡグループへ籍をおきたい。日本の実力はＡの下ともＢの上とも云われるだけに、一九七八年の世界選手権は、これまで以上に日本にとって、重大な意味をもつ大会となろう」という。

また、ＩＨＦは、オリンピック（男子）にも、このランキング制適用を考えているようで、例えば、モスクワオリンピック（一九八〇）は、一九七八年に決まるであろうＡグループ国と、一九七九年のＢグループ上位国で行う、と云った方法である。

今後の動きを注意深く見守らなければなるまい。（Ｓ）

明後年、ジュニア世界選手権

ＩＨＦはこのほど、一九七八年（昭53）の第7回世界女子選手権開催地をチェコに正式決定した。また、注目のユースによる世界選手権は「世界ジュニア選手権」の名になおし、男子はスウェーデン、女子はルーマニアで、一九七六年（昭52）に行うことが内定した。当初のユース（18才以下）に反対が多く、ジュニア（21才以下）に改められたもの。

このほか、第15回ＩＨＦ国際審判講習会が来年オランダで開かれることも確定した。

世界女子予選A

韓国開催、難行の末見通し

来冬12月キエフ（ソビエト）で開かれる第6回世界女子選手権のアジア予選Aゾーン（日本、韓国、台湾の3ケ国2回総当り）は、来春2月9日から19日まで韓国・大邱市の屋内球技場で行われる見通しがたった。ここまでこぎつけるにはかなりの曲折がありアジアハンドボール界のかかえる問題の深さ、多さを示した。

第6回世界女子選手権は、上位4ケ国（参加12ケ国）が、モントリオールオリンピック出場権を得るとあってエントリーは、史上最高の24ケ国。

大陸別予選のうち、アジア地域も、男女を通じ史上初めて5ケ国のエントリーがあり、日本の属するAゾーンは、韓国で開くようIHF総会時に申し合せ、IHFも了承した。（本誌既報）

韓国側は、総会に出席していた代表が、ハンドボール関係者でなかったため、この時点で正式決定には至らず、問題は、本国へ持ち帰られた。

韓国協会は、渡辺和美IHF理事（日本協会副会長）からの要請もあって、11月中に〝回答〟を示すことになり、再三会議を招集、その結果、「資金不足」を理由に『韓国では引き受けられない』との意見にまとまった。

この結論は、11月8日、韓国協会・洪淳泰副会長から東京の渡辺理事へ国際電話で伝えられ、同理事は了承、新たに「日本での開催」を日本協会へ打診した。

いちどは「日本開催」検討

日本協会では韓国首脳陣が世界選手権、オリンピックを問わずアジア予選開催に意欲がある、昨年3月の第5回世界女子選手権アジア予選を直前にキャンセル（＝本誌107号参照）、準備していた日本協会（東京、大阪）にめいわくをかけている、来年に予定されるモントリオールオリンピック（男子）アジア予選よりも規模が小さく運営が容易、などの理由で「引き受ける」との推測が強く流れていただけに、渡辺理事からの連絡（11月11日、口頭）は〝意外〟。とりあえず、2月11日から17日まで東京・駒沢屋内球技場を予約する一方、荒川清美理事長と在京常務理事を中心に開催計画をねりはじめたが、500万円近い経費の捻出と、国交のない台湾の入国という大課題に直面した。

いずれも、当初から予想された難題ではあったが、特に後者は、日本協会の内部努力だけでは乗り切れず、この時点で「日本開催は不可能」とする理事もあった。

このため、荒川理事長は、11月13日、渡辺IHF理事に対し「見通しの暗さ」を伝え、IHF側の再考を希望した。

これに対し同理事は、日本×韓国（2試合）を日本、日本×台湾（同）を台湾、韓国×台湾（同）を韓国で開くことを考慮したが、IHF・ヨーロッパから派遣されるウイットネス、レフェリー（2名）の経費や旅程で各国の負担が増す台湾に国際規格（40m×20m）の屋内コートがないなどから、この案を下げ、改めて韓国協会に、一部経費を3カ国が分担することを条件に、同国での開催再検討を望んだ。

韓国協会は、11月14日深夜、朴応喆理事が、渡辺理事と国際電話で話し合い「IHFからの派遣者経費を3カ国で分担する。日本、台湾は韓国での滞在費を支払う」の二点を確認、「韓国開催」の線がようやくまとまった。韓国協会から本誌締切（11月24日）までに公式通知はまだ届いていず、台湾の諾否も不明だがIHF（渡辺理事）が韓国へ示している日程は別掲のとおりで、この案どおりに決まれば、日本チームは、2月11日頃訪韓することになろう。

日本協会概算で、遠征費を含め総経費は約250万円である。

アジア代表決定戦は4月か

IHFは、第6回世界女子選手権のアジア代表を決めるAゾーンの勝者対Bゾーンの勝者の試合（2回戦制）を、来年4月末までに行うよう指示した。開催地は未定

アジア予選日程案

○……Bゾーン……○

2月1～6日イスラエル—インド
～2試合，場所未定～

○……Aゾーン……○

2月9日	韓国—台湾	（大邱）
11日	台湾—韓国	（〃）
13日	日本—台湾	（〃）
15日	台湾—日本	（〃）
17日	日本—韓国	（〃）
19日	韓国—日本	（〃）

○……代表決定戦……○

4月　A勝者—B勝者
～2試合，場所未定～

その他の地域予選

○……ヨーロッパ……○

ルーマニア（2位）—西ドイツ
ハンガリー（3位）—フランス
ポーランド（4位）—スウェーデン
チェコ（5位）—イタリア
デンマーク（7位）—オランダ
ノルウェー（8位）—スペイン
東ドイツ——ブルガリア
・勝者7カ国が本大会へ
・（　）内は前回順位

○……アメリカ……○

カナダ——アメリカ
・勝者が本大会へ

○……アフリカ……○

アルジェリア（＝代表決定）

世界学生(男子)出場メンバー決まる

全日本学生連盟は、11月21日仙台市で、来年1月4日から12日までブカレスト(ルーマニア)で開かれる第7回世界学生選手権～男子～に出場する「全日本学生選抜軍」20名(役員4、選手16)を発表した。

この大会は、FISU(国際大学スポーツ連盟)事業の一つで、最近は2年にいちど開かれており、今大会は、日本など13ケ国が出場する。日本の参加は、第1回(昭38)以来のこと。

全日本学生選抜軍は、年内二～三回の強化合宿のあと出発の予定。

メンバーは、菊池(早稲田)、村田(法政)、斎藤将(日体)、蒲生(中央)ら4人の日本協会オリンピック候補選手をはじめ、各地域学連から推せんされた35名のなかから選出された。

また、監督には、全日本学連理事会で田中秀夫氏(全日本学連理事、中大監督)が推せんされ、同監督の指名で、2名のコーチが決まった。

団長は、藤松博氏(全日本学連理事＝会長代行兼務＝、東海学連理事長)がつとめる。

選手団

団長　藤松博(全日本学連理事、名古屋工大出、44才)

監督　田中秀夫(日本協会及び全日本学連理事、中大出、中大監督、43才)

コーチ　小西博喜(日本協会技術委員、京都産大監督、42才)

コーチ　植木一久(中大コーチ、中大出、26才)

GK　藤井信昭(大阪体大3年、1m73、70K)

GK　斎藤将一郎(オリンピック候補・日体大3年、1m87、84K)

FP　脇若正二(早稲田大4年、1m80、69K)

FP　菊池悟(オリンピック候補・早稲田大4年、1m85、83K)

FP　松本義樹(中央大4年、1m73、68K)

FP　大原真造(京都産大4年、1m76、68K)

FP　布垣元也(中京大3年、1m73、65K)

FP　岸見主彦(ヤング全日本、中京大3年、1m83、76K)

FP　大熊昌己(ヤング全日本・中央大3年、1m77、72K)

FP　村田幸男(オリンピック候補・法政大3年、1m76、68K)

FP　菅野肇(ヤング全日本・日体大3年、1m81、75K)

FP　大庭泰(同志社大3年、1m80、75K)

FP　山本仲二(名城大3年、1m78、65K)

FP　中馬成一(九州産大3年、1m80、71K)

FP　蒲生晴明(オリンピック候補・中央大2年、1m92、85K)

FP　能波羊二(大阪体大2年、1m83、76K)

日本、12年ぶりの参加

学生による国際的な公式ハンドボール競技会は、FISU(国際大学スポーツ連盟)の世界学生選手権と、ISF(国際学生スポーツ連盟)の国際学生大会の二つがある。

今回参加するのは、いわゆるユニバシアード、前者のほうで、後者がヨーロッパ中心の親睦、交歓を強く打ち出しているのに比べ、チャンピオンシップとしての規模を充分に備えている。

日本の出場は実に12年ぶり。現地の大会関係者も、遠来の客に大きな期待を寄せている、と伝えられる。

本誌でも再三報じられているように、この大会はIHF(国際ハンドボール連盟)が、直接関係をしていないエベントである。

ユニバシアードというと、42年東京で行われたような〝学生オリンピック〟――総合競技会を連想するが、これは、現在では9必須競技(陸上、水泳、テニス、バレーボール、体操、バスケットボール、フェンシング、レスリング、水球)と1選択競技(柔道)に限られている(注、ほかに冬季大会)。ハンドボールはサッカー(現在廃会)、自転車などとともに、ユニバシアードの旗「FISU旗」のもとに開かれる個別の大会なのだ。

「ユニバシアード」への参加希望

日本のハンドボール界は、学生界を主流にして発展の歴史を刻んできたことから、32年(一九五七)パリで第1回ユニバシアードが開かれて以来、夏季大会競技への参加実現を〝悲願〟にしているが、IHF筋の関心がもう一つ高まらず前進を見せていない。

ヨーロッパのハンドボール界が市町村のクラブを主体にして形成され、日本ほど「学生ハンドボール」が確立されていないことも大きな原因だろう。

その流れのなかで、38年、初の世界学生選手権がスウェーデンで開かれたのは日本にとって朗報となり、当時、第6回ユニバシアード夏季大会を東京で行おうとする動きが盛んな背景もあって棚橋義輝団長、渡辺一己監督ら18人の選手団(別掲)が送りこまれた。

しかし、その後は、遠征費用がすべて自己負担(注、今回は一人約45万円)なことや、IHFが積極姿勢を示さない、などの理由から、日本協会はもちろん、全日本学連も参加を見送りつづけていた。

新戦術試運転の場

近年、IHFもようやくこの大会へ関心を払うようになったが、これはユニバシアード運動に積極

的なイタリアや、学生スポーツに理解を示すスペイン、フランスなどがIHF内で発言力を強めてきたからだ、とみられている。

日本協会としては、今回もこれまでどおり財政事情で派遣の意思を示さなかったが、全日本学連が自主事業として春以来、会議を重ねた末、参加に踏み切り、代表団発表にこぎつけたものだ。

これまでの5回はスウェーデンで2回、スペイン、西ドイツ、チェコで各1回開かれ、初め2回はIHFの歩みそのままに、北欧、西欧勢が強かったが、第3回以降は東欧勢がのし上り、最上位を独占している。

この大会から、その国のナショナルへ育った選手は数多く、各国が新技術、新戦術を、この場で試すのが一つの特徴である。

全日本学連・中沢重夫理事長は「第1回に参加した時、立教勢が当時最新の戦術といわれたセットオフェンス、ローリングオフェンスを持ち帰り、全盛時への礎にしている。サイドからのとびこみ（ブロンジョン）シュートも、この時、中根選手（立教）が身につけそれが後年、野田選手（立教—大同製鋼）のアクロバティック・シュートを世に出すきっかけになった」と評価し、今回も「技術的なおみやげが楽しみだ」と期待している。

東欧に多い「学生」優秀選手

ところで、国際学生界の実力だが、そのレベルはまちまち。

というのは、西欧勢は、各クラブに在籍する学生選手を集めて〝学生ナショナル〟を即席編成、乗りこますが、東欧勢はかなりのナショナルプレイヤーを繰り入れて計画的に強化している。

例えば、前回優勝のルーマニアはGKがペヌ（27才、当時）だしFPにはビルトラン（25才、同）、リク（27才、同）、ダン（24才、同）などの名が見える。

ユニバシアード規程では、大学卒業後2年以内の研究生ならば大会へ参加できるし、ヨーロッパでは、いったん就職後、20代後半に大学へ入る人も多いので、このようなケースもおこるわけだが「はじめから勝負にならない」という声もある。

本誌の調べによれば、今春の世界選手権出場16ケ国のメンバーには、最低2名の学生選手が含まれその合計数は74名、総選手数の約28％である。

特に多いのはスペインの11、ソビエト、アルジェリアの各10、ユーゴ7名など。この時点でソビエトはGKイチェンコ、FPパノフ、クラウゾフ、ラグティン、マショリン、オガネゾフなどが「学生」だ。

さて、大会は1月4、5、7日の3日間が4組の予選リーグ、9、10日が各組上位2ケ国によるベストエイトを2組に分けた準決勝リーグ、そのあと1月12日に順位決定戦（1～8位）という日程で、予選リーグ各組3位による9～12位決定リーグも9、10、12日の3日間に行われる。

日本は別掲のとおりC組に属しルーマニア、ポーランド、フランスと対戦する。田中監督は悪くても9～12位、あわよくばポーランド、フランスに勝ってベスト8へといっているが楽観は許せない。優勝はルーマニア、ソビエト、ユーゴの争い、ダークホースはスペイン、ブルガリアという前評判である。

日本、ルーマニアらと予選リーグ

FISU（国際大学スポーツ連盟）、ルーマニアハンドボール協会などは、10月27日、第6回世界学生選手権の予選リーグの組み分けを行い、次のように発表した。

日本のC組だけ4カ国、過去3度出場のイスラエルは今回は欠場。ヨーロッパ以外からの参加は日本だけ。（ ）内は前回(昭48)の順位

▽A組 西ドイツ（4位）、チェコ（5位）、デンマーク

▽B組 ソビエト（2位）、スペイン（6位）、イタリア

▽C組 ルーマニア（1位）、ポーランド（7位）、フランス、日本（注、日本は4日ルーマニア、5日ポーランド、7日フランスと対戦の予定）

▽D組 ユーゴスラビア（3位）、スウェーデン（8位）、ブルガリア



2年前の第5回大会・ソビエト対西ドイツ戦。FISU旗（矢印）が会場に張られている

資料・第1回大会日本代表

▽団長 柵橋義輝▽監督 渡辺一己▽コーチ 勝繁夫▽GK 谷義信(芝浦工大、主将)、奥木義昭（同志社）▽FP 安達精太、与縄義昭、中根敏男(以上立教)、村田陽之、森末和裕(以上関学)、坂井弘元(中央)、諏訪紀一(慶応)、田口敬蔵(法政)、藤原佑(日体)、浅野和郎(京大)、大高恒貴(甲南)、荘林康次(神戸大)、市原則之（広島商科大～現・広島修道大）

【注】選手の所属は当時

◇第1回（昭38・1、スウェーデン）①スウェーデン②西ドイツ③ルーマニア④デンマーク⑤ノルウェー⑥スペイン⑦日本＝参加7ケ国

日本の成績▽予選リーグA組

スウェーデン 26（13—12 13—3）5 日本

デンマーク 34（21—5 13—6）11 日本

スペイン 31（17—6 14—3）6 日本

◇第2回（昭40）優勝西ドイツ

◇第3回（昭43）優勝ソビエト

◇第4回（昭46）優勝ソビエト

◇第5回（昭48）優勝ルーマニア

全日本男女，元気いっぱいの初合宿

意欲に満ちてスタートした男子・オリンピック候補、女子・世界選手権候補（いずれも49年度ナショナル、本誌既報）が、10月末から11月はじめにかけて元気いっぱいの初合宿を行った。

男子（10月27日～11月1日・東京）社会人は国体、学生は秋季リーグ終了直後とあって、ほとんどの選手が〝故障持ち〟。しかし、どの顔にも「休んではいられない」といった気持ちが浮かんでいる。

特に、2日目に学生勢が合宿入りしてからは、いちだんと熱気がました。すさまじいばかりのシュートが飛び、実戦そのままの当りがくり返される。

アマチュア選手にとって、オリンピックという舞台でプレーするのは夢。ここに集った選手たちは、多くの憧憬と羨望を浴びながら、その夢へ一歩近づいたのである。しかし、ミュンヘンの時、リストアップされた選手は6年間で67名。そのうち晴れのプレザーコートを身につけたのは12名にすぎぬ。

「国内での激しい競争がなければ強い全日本はできない」

――コーチ時代からそれを云いつづけてきた竹野奉昭監督にとって、初合宿にみせた各選手の動きは、たしかな手ごたえがあったようである。

女子（10月26日～11月4日・茨城）いつの頃からか、女子実業団はどのチームも新人を「1年生」と呼ぶ。

ナショナルチームに9人もの1年生が入って来たのは初めてのことだ。

はつらつとしたムード、だがキャリアが男子以上にものを云う女子の国際試合で、若さは不安の材料でもある。

世界選手権にアジアから5ケ国も申しこんだのは「意外だった」（藤原コーチ）が、若手にとって予選は絶好の腕試しだ。

オリンピックに、3大陸代表（1ケ国）が認められたのも朗報。下手をすると、来冬の世界選手権で〝モントリオール〟を断念しなければならなかったのが、これで余裕が生まれた。

「〝来冬〟という土俵ぎわが、明後年夏まで延びた。オリンピック出場はもちろん、そこでメダルの希望もでてきた」と井薫監督。オリンピックイヤーに、今の1年生は、3年生に成長しているハズ。折紙つきの〝上級生〟たちも、その時までは頑張る……〟史上最強の全日本女子へ、順調な滑り出しとみた。

「カナダ国際出場」決まる

モントリオールオリンピック組織委員会（MOOC）と、カナダ協会は、来年9月25日から10月3日までモントリオール、ケベックなどで開く「モントリオールカップ（カナダ国際男子）」に出場する国を選考していたが、このほど日本の参加を正式に決め、日本協会へ連絡を寄せた。

同大会は、日本のほかヨーロッパ4ケ国とカナダによる6ケ国リーグの予定で、9ケ国の候補国のなかから日本もピックアップされたもの。

「ストイエルネン」を招待
来年3月、全日本実連

全日本実連は、加盟女子チームのレベルアップをはかるため、かねてから外国チームとの交流を計画していたが、このほどデンマーク女子「ストイエルネン・IF」クラブを来年3月、日本へ招くことになり、日本協会へ報告した。

同クラブは、オデンサにホームコートをもつデンマーク女子界の名門で、一九六四年には同国チャンピオンとなっている。

全日本実連では、3月20日から名古屋で行われる第3回NBN（名古屋テレビ）杯全国女子選抜大会のゲストチームとして、迎えるほか親善試合2～3試合を予定。

ヨーロッパの女子チームが来日するのは、42年の西ドイツ選抜、48年のOSC・ラインハウゼン（西ドイツ）についで3度目。

日本協会以外の団体が、独自にヨーロッパチームを招くのは初めてのケースである。

女子実業団もサーキット化

全日本実連は、来年度から女子の全日本実業団選手権もサーキット化（各地転戦によるリーグ）に踏み切ることを内定した。

今年度チャンピオン・東京重機工業（東京）など8チームが参加する意向。

また、2回目を迎える男子は、新たに、明年2月広島で開く第6回全国実業団トーナメントの上位2チームを加え、8チームに増やす方向で検討が進められている。男女とも5月下旬に開幕する。

学連選出 全日本学連は、11月19日仙台で開いた役員会で、藤松博氏に代って田中秀夫氏（中大出）を日本協会派遣理事とすることに決めた。藤松氏が日本協会代議員をつとめるため。

理事代る

訂　正 ▽本誌前号5頁3段目「モロッコ（加盟申請中）」とあるのは、誤りにつき削除。▽同9頁「48年度会計報告・支出」のうち、「印刷費（含機関誌）」の（含機関誌）は誤りにつき削除。

本誌は1月は休刊。次の発行は50年2月1日です。

日本協会規約の改正について

大野　金一
（日本協会常務理事）

今回の日本協会規約改正は、従来の評議員会に代えて代議員制を採用し、これに伴い全体の体系を整備するために全面改正の形式をとったもので、新しい代議員制は昭和五〇年一月一日から発足することになりました（附則＝本誌前号13頁）。

一、代議員制の概要

この代議員制の採用は、協会のより民主的かつ活発な運営を図ることを目的としたものですが、代議員制というのは、団体の意思決定機関を構成し議決するために選任された代議員によって構成する代議員会においてその団体の意思決定をしようとするもので、たとえばわが国の衆議院議員は代議士ともいわれています。

従来の日本協会評議員会は、実質的にも形式上も最高議決機関として位置づけられ、その決定したことを執行部が執行するという方式で、代議員制と言ってもよかったほどでしたが、ただ構成団体の会長が当然評議員になるという建前をとっておりました。構成団体の会長が民主的に選任されておればこれによって構成される評議員会も民主的なものであるはずだから従来の評議員であってもいいではないかという意見もあると思いますが、厳密には、代議士が各都道府県プロパーの事柄を処理する知事と違って国家的な立場でモノを考えるのと同じように、代議員は、日本協会の立場でその基本方針を定めるのがその役割であります。もちろん代議員も、地方協会なり加盟団体の代弁者としてその利害を反映しつつ、日本協会の行き方を決定するということになります。

◇代議員会の権限

代議員会は、協会の最高議決機関として、規約の改正、予算、事業計画、決算、事業報告の承認その他協会の重要事項の議決権を有するほか、会長、副会長および監事選出の権限をもっています。これは従来の評議員会の権限と同じで、かって評議員会の権限を大巾に理事会等に委譲したらという意見が評議員会においてでましたがこれらの権限は最少必要限のもので、審議時間を短縮するためには事業計画、事業報告などは重要な事業に限って付議すればよいと思います。

◇代議員の選任

代議員は、各都道府県協会および全国連盟（いわゆる加盟団体）が選出することになっています。

選出する代議員の定数は、各都道府県協会各一名とし、全国連盟は、規約で数を定めないで代議員会の議決で数を決定または変更できるようになっています。したがって全国連盟については代議員会が議決するまでの当分の間従来の評議員の定数どおり各一名としてあります（附則＝本誌前号13頁）。

◇代議員の任期

代議員の任期は、他の役員と同様二年で、この任期は昭和五〇年一月一日から起算されます。そして、おそくとも任期が切れる日までに次期の代議員を選任しておかなければなりません。初代の代議員については、おそくとも本年末日までに選任手続をしなければなりません（附則＝本誌前号13頁）。

新任の代議員による代議員会によって新しい執行部を選出することになります。

◇代議員会の会議

代議員会の招集、定例会と臨時会、定足数、表決の方法等従来の評議員会の場合と全く同様です。

ただ、従来の評議員会には、他の評議員に対する権限の委任と、各協会内部の者による代理出席の方法が併用されていましたが、余りにも便宜的すぎるので、新しい代議員会では他の代議員に対する議決権の委任の方法のみになっています。

二、活発な代議員会は期待できるか

今回の規約改正の直接のきっかけは従前の評議員会の出席率が悪かったことにあり、毎回それが話題になっていました。日本協会運営に支障がなければ、論議は不要なわけで出席率が悪いこと自体悪いことではないという理くつも成立ちますが、日本のハンドボール界の叡知と総力を結集してハンドボールの普及向上に努めようとするには、各代議員の熱意とアイデアに溢れた活発な議論が望まれるところです。

評議員会の出席率低調の原因はいろいろあったと思います。各協会の会長は公私に亘り多忙な方もあったでしょう。しかし代理出席も認められていたのですから絶対的な理由にならないでしょう。むしろ代理出席の場合の旅費負担の問題があったかも知れません。従来評議員にも旅費を支給することを前提とした「旅費規程」がありますが、評議員はこれを辞退する慣例で、代議員になって「旅費規程」の改正と予算化の問題が残っています。

また、評議員会に出席しても議論がなくて面白くないから、場所を変えるとか、他の行事と兼ね合わせるとか考えたらという意見もあったようです。しかし、日本協会のすべての活動は予算および決算に集約されているのですから、その審議を通じて協会運営に対する批判も十分可能なわけです。

結局何よりも先ずハンドボールに熱意があり、そしてある程度時間的に融通のきく人を選任することが、代議員会を活発にする第一の条件となるでしょう。（了）

代議員の届出始まる

日本協会新規約（前号参照）による新制度「代議員会」は、いよいよ1ケ月後に施行されるが、各都道府県協会、各全国連盟では、代議員の選出を急いでおり、早くも、次の各氏が、日本協会へ、初代代議員として届出られた。（到着順、敬称略。11月22日現在）

◇兵庫　常松　喬（県協会会長）
◇秋田　由利　弘（県協会理事長）
◇埼玉　遠藤健次（県協会理事長）
◇佐賀　古賀甚一郎（県協会会長）
◇群馬　高橋　潔（県協会理事長）
◇熊本　島田秀四（県協会副理事長）
◇全日本学連　藤松博（学連会長代行）

「AHF」問題進展せず

アジア競技大会種目への加入やIHF（国際ハンドボール連盟）アジア地域加盟国の増加にともなう「アジアハンドボール連盟」（AHF）の結成は、IHFが、パキスタン（IHF未加盟国）らによって準備された「AHF」を事実上認めない姿勢を示したため（＝本誌前号既報）、その後、この問題に関する進展はなく、パキスタンなどからの〝反応〟も伝えられていない。

また、IHFも、各地域（大陸別）連盟の結成に関する規約を作成すると云いながら、その作業はあまりはかどっていないようで、IHFからの指示を待っている渡辺和美IHFアジア選出理事（日本協会副会長）も、動き出せぬままだ。

渡辺理事は、来年早々にも、アジア地域のIHF加盟国を訪れたい意向だが、アジア競技連盟（AGF）加盟国で、IHFに加っていないパキスタン、中国、バーレーン、イラクなどを、どう取扱うかが大きな問題で、11月11日、本誌の質問に対し、同理事は「できるだけ早くIHFに加盟するよう働きかけることを考えたい」と注目すべき発言を行っている。

また、日本協会は、この問題について、あくまでIHFの方針を最優先する考えで、次のアジア競技大会まで、あと4年あることなどから、「当分のあいだ静観」の姿勢をとりつづけている。

なお、来春1月クウェート協会が開く「クウェート国際トーナメント」については、11月中旬までに、新しい情報はない。

ア大会は53年11月

ハンドボールを競技種目に加えたアジア競技大会は、次の第9回大会をイスラマバード（パキスタン）で開くが、このほど、その日程が一九七八年（昭53）11月15日からと発表された。この大会でハンドボールが行われるかどうかは、いぜん不明である。

日韓高校大会再開へ

日本体協の国際交流事業委員会は、このほど、日韓高校スポーツ交歓競技会について、明年は日本明後年は韓国で、これまでどおり開催する方針を決めた。

同競技会は、今夏、韓国（釜山）でハンドボール（男女）など9競技が行われる予定だったが中止され（＝本誌123号参照）、こんごの成りゆきが注目されていたものだが、韓国側の強い要望にこたえて、明年再開を打ち出したもの。

しかし、体協内部には特定国との交流に検討を望む声があり3年後からは模様替えされそうだ。

グラノラース来日へ

日本協会は、明年の新シーズン開幕国際試合の準備を進めていたが、このほどスペイン男子「バンマノス・グラノラース」（一九七三年度スペイン1位）の来日を決めた。日程は50年3月28日から4月9日までの予定で、熊本、愛知（蒲郡市）、岐阜、静岡、神奈川（横浜）で5試合の予定。

切り離せぬか政治とスポーツ

田中　滋章

クウェートらが提唱のアジア連盟設立機運をはじめハンドボール界も、難しいアジア情勢の荒波にさらされることになった。日本協会として苦慮しているものと推察しますが、ここで私たちはもう一度真のスポーツマン、ハンドボールマンとして振り返ってみる必要があるのではないか。

例えば、日本の政府が政治的に台湾は中国領土の一部と認めたことを我々も肯定することはできる。しかし台湾ですべての小学校にハンドボールポストがあり、ハンドボールチームが存在するというも事実見逃がしてはならない。

アジアの中で我国にとって最も強敵だと思われる中国と当然のように早く交流したいという気持は変らないが、これもハンドボールマンとして純粋な目で対処すべきと思う。

明春には女子世界選手権のアジア予選で台湾と当ることになったが、これを機会にハンドボール愛好者として日本協会も全アジアとは交流をつづけ、ハンドボールがこの地域で発展するよう努めて欲しいものである。

また中国や朝鮮民主主義人民共和国などとの接触も近い将来当然実現されるものと期待しているが、少なくともスポーツマンとして政治を持ち込むことなくキ然とした態度で接しようではないか。

日本協会がこの姿勢を崩さず堅持してゆくことを望んで止まない。そうすれば自ずから道は開けるものと信ずる。9月イランのアジア大会でいくつかの競技において「対戦拒否」が見られたがアジアハンドボール界でこのような〝不幸なできごと〟が起らぬことも信じたい。

（名古屋市・投稿）

3冠狙う大同製鋼が中心（男子）

〜11日から全日本総合選手権（東京）〜

女子 ビクター追う立石 重機 田村紡

今年の日本ハンドボール界を総決算、ナショナルチャンピオンチームを決める第26回全日本総合選手権が、12月11日から15日までの5日間、東京千駄ケ谷の東京体育館に、全国最強男子16、女子12チームが参加して開かれる。

モントリオールオリンピックまであと1年7カ月、女子は世界選手権を1年後（アジア予選は2カ月後）に控えているとあって、各チーム、各選手の意欲は、例年をしのぐ盛り上りを見せており、好内容の激突が大いに期待される。優勝の行方と話題を探ってみた。

（編集部）

藤中、中井らで「史上最強」へ

◇男子（参加16チームを4チームづつ4組に分け予選トーナメント各組勝者によって決勝リーグ）。

前年優勝の大同製鋼（愛知）が、王座を守り抜くか、他チームが奪還するか、が焦点。

このところ日本の男子界は〝大同〟でなければ夜も日も明けない感じ。

今シーズン上半期は、必しも絶好調とはいえず、全日本業団で三景（東京）に、5大都市で全大阪に不覚をとったが、9月の東ドイツ（世界2位）戦で大健斗、18－19と惜敗したものの、これで完全に、本来の軌道へ戻った。

茨城国体では4試合で得点80、失点41という圧倒的な強味を示し特に、決勝の湧永薬品（大阪）戦は前半完封をやってのけている。

国際級の実力を誇る藤中、中井をはじめ花輪、松原、柳川弟と5人がオリンピック候補、このほかいぜん全日本級の力をもつ巧者・野田、ベテラン加藤、全日本への復帰に燃えるGK柳川兄らの布陣は、着々と「史上最強チーム」への道を固めている感じだ。

奪還の期待、湧永、三景らに

大同を脅かすチームはどこだろうか。

真っ向からぶつかって倒す期待は、やはりキャリア豊かな選手を揃えた湧永薬品、三景、大阪イーグルスあたりに限られる。

それに、チーム力がフルに発揮された時、という条件で本田技研鈴鹿（三重）だ。

また、中大、早大、法大（いずれも東京）の学生勢が「打倒大同」だけに焦点を絞り〝一発〟を狙ってくると、爆発力があるだけに面白い。

湧永は、いぜん木野（オリンピック候補）、高橋への依存度が強いが、穂積、津川（ともにオリンピック候補）が、チームに溶けこんで思い切ったプレーを見せるようになり、これで森、戸田らベテランの味が再び活きはじめ、厚味が出てきた。GKも今井のほか、負傷していた福井（中京大）がようやく戦列に加わりはじめている。

三景は、佐々木（オリンピック候補）が精彩をとりもどし、加藤、高梨、内藤のほか、山村、川島の両新鋭も社会人のペースをのみこんできている。監督が、国体前に江名氏から喜田建男氏（中大出、FP兼任）へ代ったが試合運びの巧さは相変らずのものがある。

大阪イーグルスのまとまりも定評のあるところ。クラブというハンデを背負いながら、つねにトップクラスの力を維持しているのはたいしたものだ。攻撃陣は池木、安達、福井稔、福井孝らで、手固くポイントするタイプだが、このチームの強味はGK本田（オリンピック候補）と早川を要とするディフェンスだ。守りを固めて、巧みに相手を自分のペースに誘いこんでくる〝味〟は独得のもの。

惑星、本田技研と学生勢

本田技は、佐藤、新実（ともにオリンピック候補）という左右両巨砲をもち、田上、柳、長谷川、勝田とシャープなFP陣を形成しており、GK細野（旧姓戸田）もベテランらしい巧守を誇るが、チーム全体に調子の波が激しすぎる欠点がある。

ひとたび勢いにのれば、最上位へかけあがる実力があるだけに惜しい。「チームに欲がでてきているので、今年こそ……」と松岡監督も張り切っており、最大のダークホースに推しておこう。

さて学生勢はどうか。関東学生秋季の上位戦（10月）を観ていた実業団の主力たちは一様に「調子づかせねば……」と、チーム力そのものはあまり警戒していない口ぶりだった。

しかし、技の脇若、川畑、力の菊池（オリンピック候補）が引っぱる早大、松本大熊、・蒲生（オリンピック候補）らの中大、村田GK柴田（ともにオリンピック候補）をもつ法大と、関東各校は近来にない特色がある。また、同志社（京都）も早、中、法のような迫力はないが大庭、入江らで学生チームには、めずらしいほど老巧な試合運びを見せる。

例年だと、全日本学生選手権の終了でいったん緊張の糸がほぐれるためこの大会は、実力を発揮できぬままに終るケースも目立つが、学生界には、「モントリオール・オリンピック」が社会人とは比べものにならぬほど、強い意識となって存在しており、その意味でも今年は、燃えかたが違っている。

1回戦から「決勝なみ」の激突

ところで、これらの上位と目される各チームは、いずれも予選トーナメントで激しい星のつぶしあいを演じ、荒川日本協会理事長にいわせれば「1回戦からファイナルの内容が望める」。

とりわけ、早大×法大、湧永×中大は、1回戦屈指の好カードだし、三景×イーグルス、大同×同大など〝優勝〟に響く一戦だ。早法戦は法政にとり、全日本学生の不振を雪ぐ好機。早稲田も緊張が必要である。

また、飯田（オリンピック候補）東、荒井、井手らの大崎電気（埼玉）地味ながら大江、山川、岩本らで力をつけてきている三菱レ大竹（広島）は一つきっかけをつかめば

争覇戦線をかき乱すことになる。

昨年、法大を徹底的に苦しめた三春台ク（神奈川）、第1戦にすべてをかける京都ク、茨城教員、海上鹿屋（鹿児島）らもこの舞台へ登場してくるにふさわしい力と技があり、有力チームは軽視を許されない。

高校チャンピオン・久留米工高（福岡）の試合ぶりも話題を集めよう。緒戦の相手が三景とはきついが若々しい健斗を期待したい。

注目の立石×重機戦

◇女子（参加12チームを4チームづつ3組に分け、予選トーナメント各組勝者によって決勝リーグ、同2回戦敗者によって4位決勝リーグ）。

2連勝を狙う日本ビクター（茨城）と、田村紡（三重）の決勝リーグ進出はまず固そうだが、残る一つ、立石（熊本）×東京重機（東京）は予断できない。

立石は、昨年まで大洋デパート（熊本、廃部）で活躍した島田、蔵田、山下（いずれも全日本）、大崎電気から移ったGK和田（全日本）らを中心にした新チーム。全日本実業団（7月）、国体（10月）とも3位だが、シーズンが深まるにつれ、チーム力を引き上げ、一部には「優勝最有力」という声もあるほど。

しかし、重機も、総勢8人と持ち駒に不安はあるものの、国内ナンバーワン・古佐原（全日本）が攻防両面で、すばらしい動きを見せるほか菊地（全日本）、折口、村上、町田、市川、GK三紙とそつのない顔ぶれで、これまた「優勝」の呼び声がかかっている。

つまりは〝決勝〟にも見合う好カードで1点を争う激戦必至。立石は紀野（全日本）、石井、植原、篠田あたりの動きがカギだし、重機も、古佐原が当然マークされるだろうから、そのハンデを他の選手がどうカバーするかにかかる。

自信に満ちた日本ビクター

追われる立ち場の日本ビクターは、国体で優勝、自信に満ちている。

高野、額賀、谷沢の安定に加えて蓮見がいちだんと鋭さを増し、加藤（全日本）の進境もめざましい。

このほか、池田、阿部の両ベテランが健在だし、穂積（全日本）も、新人らしからぬプレーを見せる。GKは渡辺、鈴木（全日本）と他チームを羨しがらせる二枚を持ち万全だ。

田村紡は、三毛が、松下（全日本）、横山、金田、鈴木、和久井、新人・河田（全日本）ら若いメンバーを巧くリードしており、往年の速さ、巧さに近づきつつある。GKは久保（全日本）で無難。

第26回　全日本総合選手権 予選トーナメント組み合せ

○……男　子……○

本田技研鈴鹿（実連）
京都ク（全国社会人西地区）
法政大（開催地）
早稲田大（学連）
三景（実連）
久留米工高（高体連）
海上鹿屋（自衛隊連）
大阪イーグルス（教職員連）
三菱レイヨン大竹（実連）
三春台ク（全国社会人東地区）
中央大（学連）
湧永薬品（日本協会推）
大崎電気（実連）
同志社大（学連）
茨城教員（教職員連）
大同製鋼（日本協会推）

○……女　子……○

立石電機（実連）
徳山高OG（学連）
東京女体大（全国社会人）
東京重機工業（実連）
日体大（学連）
日立栃木（実連）
大谷高（高体連）
田村紡（日本協会推）
大崎電気（実連）
東花ク（開催地）
東京学芸大（学連）
日本ビクター（日本協会推）

【決勝リーグ日程】

・第3日（12月13日・金）15.00～19.50
・第4日（12月14日・土）15.00～19.50
・第5日（12月15日・日）13.00～17.45
～NHKTV15日16.00～17.50予定～
◇第3日以降第1試合は女子4位決定リーグ

軽視できぬ日立、大崎電気

立石または重機、田村紡、日本ビクターの実力は正に紙一重。

今春3月以降4強の対戦成績

	日本ビ	東京重	田村紡	立石	勝	分	負	得	失
日本ビ	………	3-1-0	2-0-0	1-1-0	6	2	0	73	53
東京重	0-1-3	………	2-1-0	0-1-0	2	3	3	72	76
田村紡	0-0-2	0-1-2	………	1-0-1	1	1	5	66	79
立石	0-1-1	0-1-0	1-0-1	………	1	2	2	55	58

成績は大会のみ・数字は左から勝一分一負

別表を見ると日本ビクターが他をしのぐ存在だが、9月京都で立石に8－10で土をつけられており、楽観は許されない。

日本ビクターは、大崎電気（埼玉）、田村紡は日立栃木（栃木）が、2回戦に控えており、あまり、決勝リーグのことばかり気にかけていると痛い目にあいそう。

大崎は、大場（全日本）、岩井らで復調の兆を示しており、11月はじめの東京選手権では、日本ビクターに8－11である。

昨年、大旋風を巻きおこした日立は、ゲームメーカー木村の退社が予想外にひびき、今シーズンは低迷しているが、鈴井、山井、桜庭、富田川、小根沢、GK桑谷と力は落ちていないのだから、リズムをつかめば再び躍進が期待できる。

どう挑む大谷高

学生勢はどうだろう。選手や関係者たちの間に「いつまでも実業団から相手にされないのでは…」との〝自覚〟が芽生えてきており坂木（全日本）、藤山らの日体大（東京）、西田、橋らの東京女体大（東京）、山田、安藤らの学芸大（東京）など期待はかけられるのだが、日体が日立にどうか、という程度であとの2校は苦しい。

むしろ大谷高（大阪）が、田村紡にどう挑むかのほうが興味深い。

インターハイ、国体と二冠を飾り、その原動力となったエース池渕の迫力ある攻撃は、今大会焦点の一つに数えていい。ほかに、今井、木村、GK中田など無欲でぶつかってくると、田村紡もたじたじとなるのではないか。

クラブのうち徳山高OG（山口）は田中、白井の攻撃力に頼り、東花ク（東京）は、関東学生OGで固め、個人技は実業団に見劣りしないが、練習量に不安を残す。

三菱レ、二和家具破り代表

▼全日本総合・実連男子第4代表決定戦（10月13日、岩国工体育館）
三菱レ大竹（広島）18（9－5、9－7）12 二和家具（岐阜）

▼同・全国社会人男子・西地区代表決定戦（11月24日、名古屋）
京都ク（京都）17（12－6、5－10）16 蒲郡ク（愛知）

早稲田の頭上に初の栄冠輝やく 男子

～全日本学生選手権・仙台市～

女子は日体大が5連勝の偉業飾る

第17回（女子第10回）全日本学生選手権は、11月19日開会式、20日から24日まで仙台市・宮城県スポーツセンター（第1、2日は東北工大体育館併用）に、全国各学連推せんの男子32、女子12校が参加、トーナメントで争われた。

男子は、大会前の組み合わせで有力校が密集、序盤から、激しい展開となった。

特に2回戦で、前年優勝の法政（関東）が、大阪体大（関西）の遅いペースにはまりこみ自滅、その大体大も同志社（関西）に敗れて姿を消した。このほか日体（関東）も早稲田（関東）に屈服、結局、決勝は早稲田×中央の関東勢が、初優勝をかけて対戦、激戦の末、早稲田が勝ち昭和12年創部以来の宿願をはたした。

女子は、ほとんど波乱がなく進み、日体×東京女体大と関東同士の決勝から、日体が5シーズン連続9度目の優勝を飾った。

この大会が東京、大阪以外で開かれたのは6年ぶり、仙台市では第5回大会（昭37、11人制）以来のこと。来年度の大会は、11月、初めて九州学連（北九州市の予定）の手で行われる。

京都産大、芝工大に辛勝
福井大は北大を破る

▽男子1回戦

法政（関東）16（5―5、11―2）7 東北学院（東北）
大阪体大（関西）13（11―1、2―8）9 明治（関東）
広島修道（中四国）15（7―7、8―7）14 南山（東海）
同志社（関西）20（10―6、10―6）12 東北大（東北）
岡山大（中四国）12（6―4、6―5）9 金沢工大（北信越）
京都産大（関西）13（5―5、8―6）11 芝浦工大（関東）
早稲田（関東）18（9―4、9―6）10 名城（東海）
日体（関東）33（17―9、16―4）13 福岡大（九州）

＝以上宮城県スポーツセンター

中京（東海）21（7―6、14―7）13 大阪大（関西）
福井大（北信越）11（5―5、6―3）8 北大（北海道）
東京教大（関東）18（8―5、10―7）12 福岡教大（九州）
大阪経大（関西）17（8―7、9―3）10 東京学芸大（関東）
日大（関東）20（10―1、10―6）7 甲南（関西）
九州産大（九州）19（6―4、13―3）7 桃山学院（関西）
中央（関東）24（12―1、12―5）6 仙台大（東北）
慶応（関東）17（8―4、9―4）8 岐阜大（東海）

＝以上東北工大体育館

○……宮城SC会場では、ダークホース同士・京都産大×芝工大が予想どおりもつれた。芝工大は立ちあがり好調に3―0としたが、京産大も盛り返し、一進一退。

後半15分すぎから、芝工大は西沢、生駒の活躍で20分11―9と優位に立ったが、大原の退場（5分間）で芝工大に反撃の機会を与え23分11―11、しかし26分7MT（生駒）、27分西沢のポイントでどうにか京産大が逃げこんだ。過去8回優勝の芝工大が1回戦で姿を消すのは史上初。

岡山大×金沢工大も接戦。ともに攻撃が中央に片寄りすぎたが、わずかに岡山が押し気味で後半5分8―4と開いた。しかし、金沢も粘り25分9―10と迫って予断を許さなくしたのだが、岡山は26分白川、29分石野が貴重なゴールをあげ勝負を決めた。

○……チャンピオン法政に、東北学院が食い下った。東北は法政・村田（オリンピック候補）を徹底的にマーク、前半はむしろ優勢だった。

後半になると、法政のパスワークがなんとか整いはじめ、2分から8分間に5点をあげ、主導権も移った。法政が乱調とはいえ、東北学院の健闘は賞していい。

大阪体大×明治は、前半、大体大が連続11点と一方的に攻めまくれば、後半は逆に明治のペース、23分9―13までスコアが詰まったともに有力校らしからぬ〝不安定〟である。

広島修道×南山が激しくせりあった。修道は後半なかばにみせた佐々木の3連続ゴールを活かして勝ったが、南山には惜しい勝負だった。

あるいは、の期待をいだかせた名城は、早稲田の激しい当りをかわしながら粘ったが、前半終了間ぎわからは、力の差がはっきり露われてしまった。

○……東北工大体育館の8試合は順当な結果といえるが、福井大が北大を降した一戦と九州産大が後半桃山学院を圧倒した試合ぶりに注目が集った。

福井大は同点で迎えた後半、10分までに黒田、吉村、向田が巧みな攻撃で優位に立ち、14分9―8と追いこまれたあとは、守りを固めて相手の攻撃を零封、強敵とみられた北大を押し切った。

充実めざましい九州産大は、前半こそ固さがみられたが、後半5分8―4と開いたあとは、久保（いちぢ湧永薬品に在籍した選手）、中馬、満重、金谷らがシャープなプレーで、単調な桃山ディフェン

日体，全日本総合に出られず

日体大（男子）は全日本学生選手権2回戦で早稲田に敗れたため、12月11日から始まる第26回全日本総合選手権（東京体育館＝本誌12頁参照）への出場権を失った。

昭和12年創部以来、日本ハンドボール界の主流として君臨してきた日体（現役）が戦前の全日本選手権、戦後の全日本総合選手権に出場しないのは初めてのことで、ショッキングな話題となっている。

なお、同選手権の東京（開催地）代表権をかけた第12回東京選手権（11月）でも日体は4チームを送りこみながらいずれも準々決勝までに敗れていた。

スを突き破り快勝した。

日体、攻守に精彩欠き敗退
日大、慶応を延長で降す

▽同2回戦

大阪体大 13（7 6－5 4）9 法政
同志社 18（10 8－5 5）10 広島修道
京都産大 24（15 9－3 3）6 岡山大
早稲田 17（13 4－8 3）11 日体
中京 25（11 14－10 4）14 福井大
東京教大 14（7 7－2 2）4 大阪経大
日大 15（2 1 : 5 7－0 1 : 5 7）13 慶応
中央 20（11 9－5 4）9 九州産大

○……「決勝」で顔合せしてもよい好カードが二つ。
大体大×法政は技巧派同士の対戦だったが、チャンピオン・法政が身上のパスプレーに凡失を重ね自から土俵を割るような負けっぷりで、2連覇の夢をいとも簡単に〝放棄〟した。
大体大は、後半の立ち上り6－4から一気に5点をあげたのが大きかった。法政のこの失点は、殆んどパスミスから相手になだれこまれたもので、帰陣の悪さがいっそう傷口を拡げた。
大体大は先行のゆとりで法政がゆさぶりに出ても、ディフェンスが冷静にプレー、終盤12－9と追われたが、危なげは感じられなかった。
早稲田×日体は、互いにタテの攻撃を応酬、活気のある試合になった。前半は、動きではむしろ日体が優っていたが、再三の好機をGK山田章の美技に阻まれたり、ノーマークをミスしたりしたのが痛かった。
早稲田は脇若の好リードから着実にポイント、20分4－1と主導権を握り、1点差まで詰められても、そのあと手固く加点、特に後半18分10－5からと10－8迫られた場面で、すぐに鈴木、川畑、菊池（オリンピック候補）とたたみかけ13－8とした攻撃はみごとだった。日体は、前半の逸機に気落ちしたのか、後半はシュートが単調なうえ、守りも粘りにかけた。
○……東京教大が、リーグでの低調（2部位3）をふっ切るように発らつとした攻守で大阪経大を破った。東教大は前半17分3－2から川原の3連取と西川のゴールで気勢があがり、ディフェンスも35分間、相手に得点を許さなかった。
大阪経大は当りが弱く、東教大の攻めを防ぎ止められなかった。
○……初の延長となった日大×慶応は、後半押し気味に進めた慶応が、残り2分で追いつかれ、延長後もリードしながら、当たりのない守りから日大に逆転を許す拙い試合運びで敗れた。日大・小宮の果敢なプレーが光った。
惑星視されていた九州産大はやはりスピードで中央に一歩ゆずりほとんど勝機はなかった。
○……このほかでは、京都産大、同志社の関西勢が、岡山大、広島修道の中国勢を突きはなし、中京×福井大は後半10分18－7と大差がついた。福井が最後まで試合を捨てず1点でもよけいに返そうとした試合態度は好感がもてた。

歴代優勝校

〔男子〕
①昭33 芝浦工大
② 芝浦工大
③ 芝浦工大
④ 芝浦工大
⑤ 芝浦工大
⑥ 立教大
⑦ 芝浦工大
⑧ 芝浦工大
⑨ 芝浦工大
⑩ 立教大
⑪ 日体大
⑫ 日体大
⑬ 日体大
⑭ 日体大
⑮ 日体大
⑯ 法政大
⑰昭49 早稲田

〔女子〕
①昭40 日体大
② 日体大
③ 日体大
④ 日体大
⑤ 東女体大
⑥ 日体大
⑦ 日体大
⑧ 日体大
⑨ 日体大
⑩昭49 日体大

大体大、同志社に食われる

▽同準々決勝

同志社 10（5 5－6 3）9 大阪体大

【同志】	得		【大体】	得
高橋	0	GK	藤井	0
		GK	阪下	0
入江	4	FP	山内	1
吉田	1	FP	宇尾野	1
上田	1	FP	藤田	1
早瀬	0	FP	根本	0
大庭	1	FP	矢辺	4
松井	0	FP	池田	0
金田	2	FP	平谷	0
古川	1	FP	西上	1
浅沼	0	FP	池本	0
中尾	0	FP	能波	1
計	10		計	9

早稲田 22（10 12－5 4）9 京都産大

【京産】	得		【早大】	得
日比富	0	GK	山田章	0
東口	0	GK	阪本	0
大原	1	PF	脇若	4
西沢	5	PF	川畑	8
天本	0	PF	菊池	5
生駒	1	PF	山高	3
富田	1	PF	明石	0
西田	0	PF	鈴木	1
中薗	0	PF	泉	0
萩野	0	PF	北里	0
寺岡	1	PF	山田克	1
島	0	PF	洞ヶ瀬	0

22（1）7MT（0）9

中京 16（10 6－7 5）12 東京教大

【教大】	得		【中京】	得
上原	0	GK	横山	0
		GK	千田	0
藪野	0	PF	妻鹿	1
市村	2	PF	伊賀	0
川原	1	PF	布垣	4
竹内	0	PF	岸見	5
佐藤	0	PF	佐藤	0
浜田	6	PF	三宅	0
西川	3	PF	北田	0
小西	0	PF	野田	0
若田	0	PF	吉迫	0
西田	0	PF	村上	2

16（0）7MT（0）12

中央 18（10 8－10 6）16 日大

【日大】	得		【中央】	得
上野	0	GK	柴田	0
高林	0	GK	田村	0
小宮	2	FP	松本	2
金子	5	FP	大熊	6
潮田	2	FP	蒲生	2
大渕	2	FP	上村	0
安居	0	FP	藤本	3
阿部	0	FP	松下	0
菊地	0	FP	戸田	1
西子	4	FP	関	0
大塚	0	FP	佐野	2
新井田	1	FP	西窪	2

18（1）7MT（0）16

中京、中央に食い下る
同志社は決め手欠く

▽同準決勝

早稲田 19（12 7－4 2）6 同志社

【同大】	得		【早大】	得
高橋	0	GK	山田常	0
		GK	阪本	0
入江	1	FP	脇若	3
吉田	0	FP	川畑	2
上田	2	FP	山高	4
大庭	1	FP	山田克	3
金田	0	FP	菊池	6
古川	2	FP	鈴木	1
浅沼	0	FP	明石	0
滝本	0	FP	北里	0
堀田	0	FP	洞ヶ瀬	0
		FP	泉	0

19（3）7MT（0）6

○……同志社は、早稲田をゆっくりとしたペースに誘いこもうとしたが、早稲田もその策戦は計算ずみ、早いテンポで射って出た。しかし、無理な態勢や強引なシュートが多く、あまり好い試合ぶりではなかった。特に後半の立ち上りは無得点、同志社に決め手があれば面白かったのだが3－7までストップしてしまい、そのあとは菊池の3連続ゴールなどで早稲田が一方的に押しまくった。

中央 20（14 6－6 5）11 中京

【中京】	得		【中央】	得
横山	0	GK	柴田	0
千田	0	GK	田村	0
妻鹿	0	FP	上村	0
伊賀	0	FP	大熊	6
布垣	2	FP	松下	0
岸見	2	FP	佐野	3
佐藤	4	FP	松本	4
三宅	2	FP	戸田	0
北田	1	FP	蒲生	4
野田	0	FP	関	1
村上	0	FP	藤本	2
西脇	0	FP	西窪	0

20（5）7MT（3）11

○……中央は珍しくスタートからとばし4—2と先行したが、中京もじっくりチャンスを待っては佐藤、岸見らがポイント、前半なかば一気に6—4と逆転、場内を沸かせた。

一進一退をつづけたまま後半に入り、いずれがどこで主導権を握るチャンスをつかむかに興味がもたれた。中央は10分すぎから、強引な突進で相手ディフェンスを割り、7MTを誘っては大熊が決めてあっという間に6点差をつけた。

中京が、せりあいながら終盤までもちこたえ、そこで勝機を見つけ出そうと考えていたとしたら、この中央の一気の〝爆発〟はその裏をかくもので、巧妙なベンチワークといえた。中京の健斗が光る一戦といってよい。

同大、巧みに3位の座

▽同3位決定戦

同志社 19（12—7 / 7—4）11 中京

○……中京はスピードのある攻撃で相手よりチャンスを多くつかみながら肝心なところでミスがあり同大の大庭、入江を中心としたスローペースに得点を許して、3位の座をゆずった。同大は反則退場などをきっしながら、巧い試合運びでのりきった。

後手にまわった中央

▽同決勝

早稲田 15（9—8 / 6—4）12 中央

【中央】	得		【早大】	得
柴田	0	GK	山田常	0
田村	0	GK	阪本	0
松本	3	FP	菊池	5
上村	0	FP	山高	2
蒲生	1	FP	川畑	2
大熊	6	FP	山田克	2
松下	0	FP	鈴木	4
佐野	2	FP	脇若	0
藤本	0	FP	泉	0
関	0	FP	洞ケ瀬	0
戸田	0	FP	明石	0
西窪	0	FP	北里	0

15（0）7MT（1）12

○……中央は大熊のゴールで先制元気いっぱいだったがディフェンスが、菊池、脇若、川畑ら早大の突進をかわしきれず、5分以降は後手にまわり25分9—5と早大が優位に立った。

しかし、中央は26分から激しい追いこみで3点連取、後半にすべてがかかった。

○……白熱のムードは、後半いっそう高まり、早大が1、6分菊池で11—8とすれば、中央も8分大熊、9分佐野で10—11。

結果からいえば、このあとの10分間が勝負のヤマだった。

早大が10分山高、11分鈴木、19分川畑と連続得点したのに対し、中央は、相手守備網を突き破れず無得点、14—10と早大が完全に主導権を握った。それでもなお中央は22分松本、23分大熊と反撃に成功（12—14）、終盤を盛りあげたのだが、早大は28分菊池が中央の野望を打ち砕くダメ押し点、凱歌をあげた。スリリングな好試合で、優勝を争うにふさわしい一戦だった。早大GK山田の堅守が光った。

自信、気迫、感激の早稲田

◇……試合終了と同時に、早稲田セブンは泣き、歓び、叫んだ。

昭和12年創部の名門だが、「全日本」と名のつくタイトルがその頭上に輝やいたのは初めて。東京からかけつけたOBをまじえて狂喜したのもムリはなかった。

秋の関東学生から、まさに破竹の勢い、この大会も自信にあふれて乗りこんだ。1回戦からすさまじいばかりの気迫で試合に臨み、コートサイド、スタンドから何度もどよめきをおこさせた。

最近の学生チームは、たくましさ、迫力に欠けるといわれるが早稲田は、その世評を吹きとばす攻守で優勝を飾ったのである。

「全日本総合も狙えよ」—久々に学生界が生んだ〝快チーム〟に学連関係者の激励も熱っぽかったがほとんどの選手は無言だった。

今はただ夢にまでみた学生チャンピオンの栄光をかみしめ、OBたちと、思い切り〈都の西北〉を謳いあげたいのだ…。

○……早大の惜敗記録……○

・昭25 第3回全日本学生王座決定戦 関学5—3早大（神宮）
・昭28 第6回全日本学生王座決定戦 関学13—11早大（神宮）
・昭29 第6回全日本総合選手権決勝、全日体9—6全早大（平塚）

〜いずれも11人制、本誌調べ〜

中京ら強味示す

▽女子1回戦

大阪体大（関西） 6（2—2、4—0）2 中京女（東海）

中　京（東海） 12（6—2、6—1）3 山口大（中四国）

東京学芸大（関東） 18（9—2、9—4）6 福岡教大（九州）

東京女体大（関東） 14（6—3、8—1）4 岐阜大（東海）

日体、坂本が決勝シュート

▽同準々決勝

東京学芸大 9（2—1、7—0）1 武庫川女（関西）

東京女体大 10（5—4、5—3）7 東京教大（関東）

日　体（関東） 6（4—2、2—3）5 大阪体大

	【大体】	得	【日体】	得
GK	梅谷	0	長谷川	0
GK	堀川	0	小林	0
FP	山本	0	松本	1
FP	高木	2	坂上	0
FP	松本美	1	坂本	4
FP	大谷	0	小田	1
FP	金森	0	寺尾	0
FP	松本ひ	2	林	0
FP	平山	0	藤山	0
FP	船橋	0	岩本	0
FP	青木	0	門田	0
FP	奥野	0	菅井	0

6（0）7MT（1）5

中　京 10（4—2、6—2）4 日女体大（関東）

○……優勝争いに響く日体×大体大戦は、延長かとみられたタイムアップ7秒前、日体・坂本（全日本）の強引に射ちこんだシュートがバーに当りながらゴールに落ちこんで、一瞬に勝負の明暗を描き出す劇的な幕切れとなった。

それまでの経過は、互いに波がみられ、日体4—1のリードのあとは大体大が高木、松本（ひ）で4—4まで盛り返した。

約10分重苦しいムードで経過し後半23分日体は松本で勝ちこしたのだが、24分20秒大体大は7MTを高木が決めてタイ、延長にもちこんだかとみえたのである。

○……このほかの試合では、東京教大が東女体大を苦しめた一戦と東京学芸が、前年3位の武庫川女を後半攻めまくって快勝した試合ぶりが目についた。

地方勢では、中京がいちばん安定しており6年ぶりでベストフォアに勝ち残った。

日体、東女体勝ち進む

▽同準決勝

日　体 10（5—2、5—1）3 中　京

○……中京はこまかいパスとカットインで好機をつかもうとしたが日体の巧い守りに、フォロープレーをたち切られてシュートまで持ちこめず完敗だった。日体はインターセプトなどから速攻を実らせ着々と加点して中京を突き放した。

	【中京】	得	【日体】	得
GK	佐々木	0	長谷川	0
GK	川合	0	小林	0
FP	藤井	1	松本	2
FP	和多	0	坂上	3
FP	石川	0	坂本	0
FP	浦崎	1	寺尾	2
FP	松坂	0	林	0
FP	加藤	0	藤山	0
FP	古山	0	小田	1
FP	芹野	0	岩本	2
FP	都筑	0	菅井	0
FP	今木	1	門田	0

10（0）7MT（0）3

東京女体大 13（5—3、8—6）9 東京学芸大

	【学芸】	得	【東女】	得
GK	高橋	0	鍋田	0
GK	打田	0	梶原	0
FP	伊藤	0	西田	1
FP	永沢	2	赤岸	2
FP	安藤	4	篠倉	3
FP	星野	0	橘	3
FP	奈倉	1	寺田	0
FP	山田	2	中田	0
FP	斎藤昭	0	野口	1
FP	前田	0	松岡	0
FP	寺井	0	三沢	2
FP	斎藤順	0	岩永	1

13（2）7MT（0）9

○……つねに先行していたのは東女だが、学芸も安藤のサイドと山田のロングで粘り、好試合となった。しかし、最後はパスワークと脚力にまさる東女が好機を確実に活かし、残り5分5点（12—7）差に開いて勝った。

東京学芸、初の3位

▽同3位決定戦

東京学芸大 8（3—3、5—3）6 中　京

○……同じような実力だったが、学芸は後半、安藤、山田のコンビが積極的に射って出た策戦が当り粘る中京を振り切った。学芸は初の3位。

東女体大、逆転もつかのま

▽同決勝

日　体 12（4—3、8—4）7 東京女体大

	【東女】	得	【日体】	得
GK	鍋田	0	小林	0
GK	梶原	0	長谷川	0
FP	西田	0	松本	5
FP	橘	2	坂本	3
FP	赤岸	3	坂上	0
FP	篠倉	0	藤山	0
FP	野口	2	林	1
FP	寺田	0	小田	2
FP	三沢	0	岩本	1
FP	岩永	0	門田	0
FP	松岡	0	菅井	0
FP	中田	0	寺尾	0

12（5）7MT（0）7

○……後半8分4—5とリードされた日体が、みごとな集中攻撃で一気に主導権を握り快勝した。

日体は前半2本の7MTなどで先行したが、東女も後半6、7分赤岸の連続得点で逆転、激戦となった。このあと日体は8分7MTで同点とし、松本、坂本の好シュートで16分10—5と大差をつけた。

東女の西田を主軸とするパスプレーは鮮やかだがロングシューターを欠くため、どうしても攻撃に厚味がない。その点、日体は、坂本に積極性が出て強味を増した。

後記は岡前義春、八重樫英治、加藤正彰、関川正道（以上大会審判員）、伏見和則、宮城薫（以上全日本学連委員）、杉山茂（NHK運動部）各氏によるものを編集部でまとめました。

⦿各地学生秋季リーグ戦（続報）

各校善戦も北大ゆるがず

北海道学生秋季リーグ（兼第6回北海道知事杯争奪選手権）は、10月25日から27日までの3日間、北海道教大釧路分校体育館に6校が集り行われ、北大が苦戦を強いられながらも全勝、春季との通算で7度目の優勝を飾った。知事杯には6連勝。

		前半	後半		
室蘭工大	22	11－6	11－7	13	小樽商大
北見工大	18	12－8	6－7	15	旭川教大
北　　大	13	6－10	7－2	12	釧路教大
旭川教大	27	13－12	14－5	17	小樽商大
北　　大	12	6－6	6－3	9	北見工大
室蘭工大	16	6－10	10－6	16	釧路教大（引き分け）
釧路教大	29	18－7	11－5	12	小樽商大
北　　大	14	7－4	7－2	6	旭川教大
北見工大	13	6－4	7－6	10	室蘭工大
北　　大	13	10－4	13－2	6	小樽商大
旭川教大	18	9－8	9－6	14	室蘭工大
北見工大	15	6－5	9－3	8	釧路教大
北　　大	13	7－5	6－1	6	室蘭工大
北見工大	14	4－4	10－8	12	小樽商大
釧路教大	21	9－8	12－11	19	旭川教大

【順位】①北大5戦全勝②北見工大4勝1敗③釧路教大2勝1分2敗④旭川教大2勝3敗⑤室蘭工大1勝1分3敗⑥小樽商大5敗

○……新メンバーで臨んだ常勝北大が第1日、地元釧路教大と北見工大の健斗にあい苦戦、前半の優位を活かし、逃げこんだものの、この2試合で、大会全体にがぜん熱がこもった。

第2日、前日無キズの室蘭工大が調子を乱し、期待された北大戦（第3日）を待たず脱落してしまった。一年生が多いせいか、接戦になるともろさが出る。

一方、北大は、ディフェンスの立ちなおりから、本来のチーム力を発揮、勝ち星をつみあげた。

優勝争いは、北大（4勝）、北見工大（3勝1敗）の両校にしぼられたが、北見工大には〝自力〟での望みはなく、仮に同率で得失点差にもちこんでも北大有利の形勢だった。

第3日、余裕の北大は、室蘭工大を寄せつけず優勝を決めた。北見工大は、小樽商大の善戦にあったが、どうにか振り切り2季連続2位を確保。3位は最終戦をものにした釧路教大。

全般にひところより点差のつまった接戦は多くなったが、リーグ自体のレベルアップのため、各校いっそうの努力を望みたい。なお最多得点者は33点をマークした荒木（小樽商大）、最優秀GKには苅谷（北大）が選ばれた（桜井治・北海道学連副委員長）

修道、秋季に9年ぶり　中四国

中四国学生秋季リーグは11月3、4日の両日広島県呉豊栄高球技場に1部5、2部6校が参加して行われた。

1部は、かってない激戦となり広島修道が山口大を得失点差でかわし優勝を決めた。広島商大時代をふくめ、3シーズンぶり9度目の栄冠。秋季の優勝は40年以来のこと。女子は休会。

1部は波乱に富んだ展開のすえ広島修道が、最終戦・愛媛大の反撃を辛くも振り切って、山口大と並び、得失点差で、きわどく優勝を決めた。

修道×愛媛戦を前に、全日程を終了した山口大は3勝1敗、得失点差12。修道は勝てば得失点差に関係なく優勝のケース。しかし、愛媛大は、2部から上ったばかりとは云え、緒戦で山口大を破り、春季優勝の岡山大とも互角の勝負を演じるなど上り坂。はたして、修道は、前半こそ優位に立ったが後半追いこまれ、色を失う場面もしばしばだった。

広島工大が、やや水をあけられた以外は、4校の実力が近来になく伯仲、特に愛媛大の試合ぶりは賞される。山口大は、第2戦以降立ちなおっただけに、最初のつまづきが悔やまれよう。

2部は、3校づつ2組の一次リーグのあと広島大福山と近大工学部が首位を争い、広島大福山が2度目の優勝となった。

▽1部

		前半	後半		
愛媛大	12	7－2	5－6	8	山口大
修道	29	14－5	15－6	11	広島工大
岡山大	9	5－3	4－3	6	愛媛大
山口大	13	9－4	4－3	7	広島工大
修道	20	7－10	13－6	16	岡山大
山口大	18	9－3	9－6	9	岡山大
愛媛大	15	8－4	7－4	8	広島工大
山口大	15	8－4	7－10	14	修道
岡山大	26	13－5	13－7	12	広島工大
修道	12	6－8	6－3	11	愛媛大

【順位】①修道3勝1敗（得失点差22）②山口大3勝1敗（12）③愛媛大2勝2敗（7）④岡山大2勝2敗（4）⑤広島工大4敗

▽2部一次リーグA組

広島大	12	9	香川大
近大呉工学部	12	11	広島大
近大呉工学部	17	14	香川大

▽同B組

広島大福山	13	8	松山商大
松山商大	13	10	山口大工学部
広島大福山	12	9	山口大工学部

▽同5・6位決定戦

香川大	12	3	山口大工学部

▽同3・4位決定戦

広島大	14	12	松山商大

▽同首位決定戦

広島大福山	14	10	近大呉工学部

【最終順位】①広島大福山②近大呉工学部③広島大④松山商大④香川大⑥山口大工学部

中四国学連優勝回数

広島修道・9回、岡山大・6回、松山商大・6回、山口大・4回

＝本誌調べ

大阪体大、全勝で6連覇

関西学生秋季リーグは9月28日から10月27日までの15日間、大阪市中央体育館、大阪府立大学体育館などで男子5部30、女子6校が参加して行われ、男子1部は大阪体大が6シーズン連続6度目の優勝、女子は甲子園女子短大が復調、3シーズンぶり8度目の優勝を飾った。

女子は甲子園女短大が復調

男子1部は、3年連続春秋制覇を狙う大阪体大が、緒戦・大阪大戦にやや乱れを見せたものの、その後は順調に勝ち星を重ね5勝、最終日に臨んだ。

有力な対抗にのしあがった京都産大は、1、2戦無難に切り抜けたが、同志社戦で、相手ディフェンスの健斗にあって引き分け、半歩の遅れで大阪体大と対戦した。

大阪体大×京都産大戦は予想どおり白熱、大阪体大が巧く先制したが、京都産大も粘り、勝負を後半にかけた。

大阪体大は勢いよくとばし後半10分10－4とリード、そのまま押し切るかにみえたが、京都産大は勝負を捨てず、残り5分10－11まで追いこんだが、そのあと1点を失い、大阪体大の辛勝となった。

大阪体大は6連覇、48年春以来の全勝優勝(4度目)を飾った。

このほかでは甲南が健斗して下位グループを盛りあげた。

2部は、春季1部の近大がさすがに強く、波にのった大阪府大に引き分けた以外は順当勝ち、3度目の優勝。名門関大は最下位。

3部は春季不振で最下位の関学が立ち直り、大阪薬大戦を落として全勝は逸したものの優勝、浮上の足がかりをつかんだかに見えたが、入れ替え戦では敗れた。

4部は前評判どおり大阪教大が圧倒的な強味を示し首位、加盟4シーズン目の姫路工大のレベルアップが目についた。5部は奈良教大が2勝1分で1位となった。

なお、得点王は1部が30点の橋本光正(大阪経大4年)、2部が28点の船井祐次(大阪府大3年)、3部が31点の佐谷光一(天理4年)と宮崎治郎(近大2年)、4部が20点の三善勝博(関西外語大4年)と片岡幹雄(大阪歯大)、5部が川西智樹(奈良教大4年)の各選手だった。

京都産大、同志社と分ける

◇1部

同志社 16（9－3 7－6）9 桃山学院

大阪体大 18（8－4 10－6）10 大阪大

京都産大 15（9－4 6－4）8 甲南

大阪体大 19（14－3 5－3）6 桃山学院

同志社 25（11－8 14－3）11 大阪大

大阪経大 11（5－4 6－6）10 甲南

大阪経大 16（11－7 5－3）10 桃山学院

同志社 14（10－6 4－7）13 甲南

京都産大 17（10－7 7－3）10 大阪大

大阪体大 25（13－3 12－1）4 甲南

同志社 8（4－2 4－6）8 京都産大
引き分け

【京産】得
GK 日比 0
GK 清水 0
FP 大原 1
FP 西沢 3
FP 天本 2
FP 岩原 0
FP 荻野 0
FP 島 0
FP 富田 0
FP 西田 0
FP 寺岡 0
FP 生駒 2

【同志】得
GK 高橋 0
FP 入江 0
FP 吉田 2
FP 上田 3
FP 大庭 2
FP 松井 0
FP 金田 1
FP 古川 0
FP 浅沼 0
FP 滝本 0
FP 堀田 0

(審・吉川 楮谷)

8（0）7MT（8）8

○……京産大は前半着実にポイントし先行したが、後半2分7－5のあとは、まったく動きがチグハグで以後24分無得点の貧攻。手痛い引分けとなった。

大阪大 23（16－8 7－5）13 桃山学院

大阪体大 20（13－3 7－4）7 大阪経大

京都産大 17（8－6 9－2）8 桃山学院

大阪体大 16（8－4 8－2）6 同志社

【同志】得
GK 高橋 0
FP 松井 0
FP 大庭 0
FP 上田 0
FP 吉田 2
FP 入江 4
FP 金田 0
FP 古川 0
FP 滝本 0
FP 浅沼 0
FP 堀田 0

(審・保田 伊谷)

【大体】得
GK 藤井 0
GK 阪下 0
FP 山内 2
FP 宇尾野 1
FP 藤田 5
FP 根木 2
FP 矢辺 2
FP 池田 1
FP 平谷 1
FP 能波 1
FP 西上 0
FP 丸井 1

16（2）7MT（0）6

京都産大 12（6－4 6－1）5 大阪経大

大阪大 14（7－4 7－2）6 甲南

甲南 18（12－6 6－5）11 桃山学院

【桃山】得
GK 亀井 0
FP 中川 3
FP 三浦 0
FP 岡野 2
FP 篠木 0
FP 平手 2
FP 堀本 0
FP 中尾 0
FP 朝倉 3
FP 側瓦 1
FP 安藤 0

(審・楮谷 伊谷)

【甲南】得
GK 藤岡 0
GK 加藤 0
FP 石橋 1
FP 伊藤 2
FP 高橋 3
FP 沢田 0
FP 古谷 3
FP 辻村 2
FP 谷木 0
FP 川西 1
FP 中村 4
FP 武田 2

18（1）7MT（1）11

大阪経大 21（10－10 11－4）14 大阪大

【阪大】得
GK 森 0
FP 大山 3
FP 蒲池 2
FP 新家谷 2
FP 華井 0
FP 溝口 0
FP 三木 0
FP 片山 0
FP 中井 3
FP 清見 1
FP 小山 3

(審・伊谷 楮谷)

【経大】得
GK 木村勝 0
FP 二宮 0
FP 橋本 7
FP 石井 3
FP 塩川 0
FP 太田 9
FP 林 0
FP 山本 0
FP 田安 0
FP 篠原 0
FP 木村純 2

21（1）7MT（0）14

同志社 17（9－5 8－7）12 大阪経大

大阪体大 12（6－6 6－4）10 京都産大

【京産】	得
GK 日比	0
GK 清水	0
FP 大原	2
FP 西沢	3
FP 天本	1
FP 岩原	0
FP 生駒	4
FP 鳥	0
FP 荻野	0
FP 富田	0
FP 西田	0
FP 寺岡	0

【体大】	得
GK 藤井	0
GK 阪下	0
FP 山内	1
FP 池田	0
FP 根本	3
FP 藤田	1
FP 矢辺	1
FP 宇尾野	1
FP 能波	0
FP 丸井	3
FP 西上	2
FP 佐々木	0

（審・古川・樫塚）

12（1）7MT（0）10

○……試合は5分藤田、7分矢辺の得点で大体大が先行、京産大も7分大原のゴールを口火に反撃、17分4－2と逆にリードを奪った。このあと再び大体大が、調子を取り戻し4点を奪い、その勢いを後半にも持ちこんで10分までに根本の活躍などから4点を加えて10－4差をつけた。これで、勝負のメドは一応ついたかにみえたが、京都産大は生駒の連続ゴールで逆襲のきっかけをつかみ、西沢の巧技もあって25分10－11と追いあげる粘りをみせた。しかし、大体大は29分根木がダメ押し点を決め、京都産大にとっては、後半立ち上りにペースを握れなかったのが惜しまれる。

関西学生秋季（1部）

	体	産	同	経	阪	甲	桃	P	勝	分	負	差
①大体大	…	○	○	○	○	○	○	12	6	0	0	
②京産大	●	…	△	○	○	○	○	9	4	1	1	28
③同志社	●	△	…	○	○	○	○	9	4	1	1	17
④大経大	●	●	●	…	○	○	○	6	3	0	3	
⑤大阪大	●	●	●	●	…	○	○	4	2	0	4	
⑥甲南	●	●	●	●	●	…	○	2	1	0	5	
⑦桃山学	●	●	●	●	●	●	…	0	0	0	6	

【2部順位】①近畿大5勝1分②大阪府大4勝1分1敗③京大4勝2敗④神戸大3勝3敗⑤京都教大2勝4敗（得失点差－8）⑥立命館2勝4敗（－22）⑦関大6敗

名門関大、1勝もできず

▽2部

京大 16－12 京都教大
神戸大 15－12 立命館
近大 18－11 関大
大阪府大 19－18 立命館
近大 24－11 神戸大
京大 12－11 関大
大阪府大 20－14 京都教大
神戸大 17－11 関大
立命館 16－15 京都教大
近大 12－11 京大
京大 15－14 立命館
大阪府大 17－10 京大
京都教大 22－16 神戸大
近大 16（分）16 大阪府大

【府大】	得
GK 前田	0
GK 川本	0
FP 和気	3
FP 中野	1
FP 船井	3
FP 樋口	0
FP 上久保	3
FP 上田	0
FP 片田	0
FP 田中孝	0
FP 田中美	1
FP 村田	5

【近大】	得
GK 岡本	0
GK 藤田	0
FP 西野	0
FP 政香	0
FP 小川	4
FP 石川	0
FP 菅	0
FP 西辻	3
FP 夏原	4
FP 芝田	4
FP 浜本	1
FP 島川	0

（審・曽我部・吉川）

16（1）7MT（3）16

立命館 17－13 関大
京大 17－11 神戸大
近大 29－7 立命館
京都教大 13－10 関大
大阪府大 18－9 関大
近大 18－12 京都教大
神戸大 21－12 大阪府大

関学3部で優勝

▽同3部

和歌山大 15－10 竜谷
大阪市大 10－7 大阪薬大
関学 18－7 追手門学院
天理 26－18 竜谷
追手門学院 19－12 和歌山大
関学 15－8 大阪市大
天理 17－10 大阪市大
関学 17－10 竜谷
大阪市大 13－8 竜谷
和歌山大 9－7 大阪薬大
天理 26－9 追手門学院
追手門学院 14－9 大阪薬大
和歌山大 21－9 大阪市大
大阪市大 15－14 追手門学院
関学 18－15 天理
関学 20－16 和歌山大
大阪薬大 19－14 天理
竜谷 12（分）12 大阪薬大
天理 20－11 和歌山大
竜谷 12－10 追手門学院
大阪薬大 8－5 関学

【順位】①関学5勝1敗②天理4勝2敗③和歌山大3勝3敗（得失点差マイナス1）④大阪市立大3勝3敗（マイナス17）⑤大阪薬科大2勝1分3敗⑥追手門学院2勝4敗⑦竜谷1勝1分4敗

4部は大教大、5部奈良教大

▽同4部

大阪工大 21－17 大阪歯大
関西外語大 15－12 大阪工大
姫路工大 16（分）16 大阪歯大
大阪教大 19－10 関西外語大
大阪工大 20－15 姫路工大
大阪歯大 14－11 関西外語大
大阪教大 17－11 大阪工大
関西外語大 14－12 姫路工大
大阪教大 23－12 大阪歯大
大阪教大 27－14 姫路工大

【順位】①大阪教大4戦全勝②大阪工大2勝2敗（得失点差0）③関西外語大2勝2敗（マイナス7）④大阪歯科大1勝1分2敗⑤姫路工大1分3敗

▽同5部

京都工繊大 13－8 大阪外語大
奈良教大 11－9 京都工繊大
京都工繊大 15－10 神戸商船
奈良教大 7（分）7 大阪外語大
大阪外語大 21－9 神戸商船
奈良教大 13－10 神戸商船

【順位】①奈良教大2勝1分②京都工芸繊維大2勝1敗③大阪外語大1勝1分1敗④神戸商船3敗

大阪体大2位に

武庫川女3位

女子は、新たに大阪成蹊女短大が加盟、6大学リーグとなった。

リーグ前の予想では3連勝を狙う武庫川女と、西日本学生（7月山口）の優勝校・大阪体大の争い

とみられていたが、甲子園女短大が鮮やかに復調、もつれた展開となった。

甲子園はまず大阪体大戦を秀れた攻撃力で勝ちとったあと、武庫川女とは、近来にない好試合を演じた末、終了寸前6－7から、新人・魚谷が劇的な同点シュートをたたきこみ、引き分けに持ちこんだ。

この結果、武庫川女は、大阪体大戦に8点差以上をつけて勝たねば優勝できぬことになり、タイムアップと同時にしぼしぼう然、一方、甲子園は、泣き出す選手もいるほどの興奮ぶりだった。

最終戦・武庫川女×大阪体大は武庫川に鋭さがなく4－4というロウスコアで引き分けかと見えたが、大阪体大は終了間ぎわ、高木のゴールで勝ち、武庫川女は3位に転落してしまった。

初参加の成蹊女短大の試合ぶりにも注目が集ったが、リーグ後半2勝をマークしたのは賞される。スピードの養成に課題を残すが、今後が楽しみである。

個人最高得点者は、35点をマークした魚谷政子（甲子園女短大）選手。

大阪体大 8（5 3－0 1）1 大阪教大

甲子園女短大 31（16 15－0 0）0 大阪薬大

得	【甲子】		【大薬】	得
0	石田	GK	遠山	0
5	神野	FP	上野	0
3	前田		岡田	0
4	松下		香田	0
10	魚谷		西岡	0
8	仁張		野勢	0
0	大音師		塚木	0
1	長谷川		北川	0
		（審・川崎 楮谷）	沢崎	0
			上田	0
31	（0）	7MT	（0）	0

武庫川女 34（15 19－0 1）1 成蹊女短大

大阪教大 20（11 9－1 0）1 大阪薬大

甲子園女短大 14（7 7－3 4）7 大阪体大

得	【甲子】		【体大】	得
0	石田	GK	梅谷	0
			堀川	0
6	仁張	FP	山本	2
1	神野		高木	1
5	魚谷		松本美	0
1	松下		大谷	0
1	前田		東野	0
0	長谷川		金森	2
0	大音師		青木	0
		（審・保田 伊谷）	平山	0
			船橋	0
			松本ひ	2
14	（1）	7MT	（0）	7

大阪体大 22（12 10－1 1）2 成蹊女短大

甲子園女短大 9（6 3－1 2）3 大阪薬大

武庫川女 31（18 13－2 2）4 大阪薬大

武庫川女 12（8 4－2 1）3 大阪教大

甲子園女短大 33（16 17－0 1）1 成蹊女短大

成蹊女短大 8（4 4－4 3）7 大阪教大

大阪体大 26（15 11－0 0）0 大阪薬大

成蹊女短大 12（7 5－3 1）4 大阪薬大

得	【教大】		【成蹊】	得
0	市居	GK	畑中	0
0	大出		白石	0
0	牧野	FP	山田	0
1	八木		川見	3
0	永原		亀田	0
2	佐薬		高井	0
1	田中		西端	5
3	山本		宮山	0
0	松原		国府	0
		（審・森 保田）	中谷	0
			森田	0
			杉原	0
7	（0）	7MT	（8）	8

甲子園女短大 7（3 4－3 4）7 武庫川女

得	【甲子】		【武庫】	得
0	石田	GK	吉田	0
			田村	0
3	魚谷	FP	寺尾	2
1	松下		赤尾	0
1	神野		三輪	3
2	仁張		辻	1
0	前田		谷本	0
0	大音師		小西	0
0	長谷川		沢田	1
		（審・森 宍倉）	岩井	0
			佐野	0
			藤木	0
7	（1）	7MT	（1）	7

大阪体大 5（3 2－2 2）4 武庫川女

得	【体大】		【武庫】	得
0	梅谷	GK	吉田	0
0	滝木		田村	0
2	山本	FP	小西	0
0	金森		谷本	0
1	高木		辻	1
0	東野		三輪	0
0	大谷		寺尾	1
1	松本美		赤尾	1
0	松本ひ		沢田	1
0	平山	（審・山中 吉川）	岩井	0
1	船橋		佐野	0
0	青木		藤木	0
5	（1）	7MT	（0）	4

【順位】①甲子園女短大4勝1分②大阪体大4勝1敗③武庫川女大4勝1分1敗④成蹊女短大2勝3敗⑤大阪教大1勝4敗⑥大阪薬大5敗

近大1部へ、関学浮上せず

▼男子各部入れ替え戦（11月3日・大阪府立大学体育館）

▽4～5部

京都工繊大（5部②）17－14 大阪歯大（4部④）

姫路工大（4部⑤）18－8 奈良教大（5部①）

▽3～4部

追手門学院（3部⑥）22－18 大阪工大（4部②）

大阪教大（4部①）17－13 竜谷（3部⑦）

▽2～3部

天理（3部②）19－13 立命館（2部⑥）

関大（2部⑦）11－10 関学（3部①）

▽1～2部

甲南（1部⑥）19（12 7－8 11）19 大阪府大（2部②）

引き分け

甲南は1部残留

近大（2部①）18（10 8－2 5）7 桃山学院（1部⑦）

福井大、金沢工大破る

初の北信越学生選手権

初の北信越学生選手権が11月9、10日の両日、石川県体育館に5校が参加して開かれた。福井大がリーグ優勝の金沢工大を破り初優勝

▽1回戦（1試合）

金沢大（石川）16（12 4－6 7）13 富山大（富山）

▽準決勝

福井大（福井）27（15 12－7 7）14 金沢美工大（石川）

金沢工大（石川）13（7 6－4 5）9 金沢大

▽決勝

福井大 14（7 7－6 2）8 金沢工大

早稲田、法政破り全勝優勝

女子は日体が30度目の栄冠

関東学生秋季リーグは、予想どおり前半戦を4戦全勝で飾った4強（＝本誌既報）によって、注目の終盤戦が9月22、26、27日の3日間東京・駒沢屋内球技場で展開された。

その結果、中央、日体をそれぞれ破った早稲田と法政が最終日、優勝をかけて激突、熱戦の末早稲田が逆転勝ち、2シーズンぶり11度目の優勝を飾った。女子は日体が宿敵・東京女体大を降し、3シーズン連続30度目の優勝を遂げた。

〃4強戦〃は法政の活躍でいっそう熱をおびた。

リーグ戦前の予想では中、早についで三番手にあった法政だが、中央戦を逆転で取ってから波にのり、日体戦も鮮やかな集中攻撃で快勝した。

一方、早稲田は日体戦を手固くものにしたあと、ヤマとみられた中央戦も前半なかばから、たえず先手をとりつづけて振り切った。これで中央は春秋連覇の夢をたたれた。

優勝をかけた早稲田×法政はさすがに見応えのある試合となり、勝負の流れはいちど法政に傾きかけたが、渋とさを身につけた早稲田は後半14分から連続5点をあげて主導権を奪いとり、食い下る法政を退けた。

復調を期待された日体は、伝統の試合運びの巧さがカゲをひそめ最終日、気落ちした中央を破ったにとどまり3位。Bクラスは明治が順当に他の3校をおさえた。

2部は、国士舘が好調に全試合を乗り切って初優勝。

3部は千葉工大が東工大戦を引き分けた以外はまとまりのある攻守で46年春以来2度目の優勝。

4部は混戦の末、武蔵工大が初。

5部は、参加13校を2組に分けリーグ戦のあと各組同位者が対戦して順位を決め、東京経大が48年春につづき2度目の首位となった。

なお、得点王は1部が2度目の村田幸男（法政、オリンピック候補）と福地和彦（慶応）が36点で分けあい、2部は66点のハイスコアをマークした田中秀美（国士舘）に決まった。3部は40点の茅野昌義（青山学院）、4部は54点の東門巽（東大）がそれぞれ春季につづき連続受賞。女子は、山田美代子（東京学芸大）が17点で3シーズン連続の快記録。

◇第8日（10月19日）

▽男子5部Aブロック

亜細亜 36－10 東京写真大

東京経大 24－13 明治学院

▽同Bブロック

横浜市大 20－19 武蔵

和光 12－6 東京理科大

独協 15－14 日本工業大

日本工業大 28－16 東京農工大

◇第9日（10月20日）

▽男子2部

明星 15－11 東京教大

順天堂 26－18 東海

▽同3部

横浜商大 21－9 都立大

成蹊 13－9 東京工大

千葉工大 14－10 青山学院

立教 15－13 防衛大

▽同4部

千葉大 21－7 神奈川大

武蔵工大 18－15 上智

専修 11－10 東大

茨城大 32－32 千葉商大

▽同5部Aブロック

亜細亜 不戦勝 東邦

東京経大 24－11 東京写真大

明治学院 20－19 一橋

【同順位】①東京経大5戦全勝②一橋3勝2敗（得失点差28）③亜細亜3勝2敗（27）④明治学院3勝2敗⑤東京写真大1勝4敗⑥東邦5敗

▽同Bブロック

横浜市立大 11－10 和光

日本工大 15－8 東京理科大

独協 20－15 東京農工大

日本工大 28－16 東京農工大

【同順位】①日本工業大5勝1敗（得失点差31）②独協5勝1敗（15）③横浜市立大3勝1分2敗④武蔵3勝3敗⑤東京理科大2勝4敗（マイナス4）⑥和光2勝4敗（マイナス6）⑦東京農工大1分5敗

法政、中央に逆転勝ち

◇第10日（10月22日）

▽男子1部

明治 17（8－8、9－2）10 芝浦工大

【芝浦】	得		【明治】	得
吉田	0	GK	岡部	0
吉川	0	FP	指宿	3
押切	0	FP	山岡	5
安中	4	FP	山根	1
柳原	1	FP	石井	0
舛屋	1	FP	江幡	0
柳沢	3	FP	松木	4
斉田	1	FP	加納	4
新井	0	FP		
伊集院	0	FP		

17（3）7MT（0）10

日大 16（6－6、10－9）12 慶応

早稲田 12（5－5、7－5）10 日体

【日体】	得		【早大】	得
奥川	0	GK	山田章	0
斉藤将	0	GK	阪本	0
喜井	1	FP	脇若	0
橋本	3	FP	川畑	3
中山	2	FP	山田克	1
竹本	0	FP	菊池	5
菅野	1	FP	明石	0
坂本	1	FP	山高	2
大房	0	FP	鈴木	1
後川	0	FP	泉	0
半田	0	FP	北里	0
斉藤幸	2	FP	洞ケ瀬	0

12（2）7MT（4）10

○……前半は両校とも動きが固く決定的なポイントをあげることができなかった。後半、早稲田は6－6から11分山田克、14分菊池（オリンピック候補）で先行、1点差に追いあげられたあとも、すぐ山高の7MTなどで優位を保ち、さらに21分、再び山高が7MTを決めて11－8、この余裕を最後までもちこんだ。

日体は、せりあいに持ちこみながら、自から好機をつぶす拙攻で自滅した。

法政 15（7－6、8－7）13 中央

【中央】	得		【法政】	得
柴田	0	GK	柴田	0
田村	0	GK	森田	0
松本	1	FP	矢島	1
上村	4	FP	高橋	0
松下	0	FP	大西	1
佐野	1	FP	上滝	1
大熊	6	FP	村田	6
藤本	0	FP	青山	3
蒲生	0	FP	阿部	3
戸田	0	FP	古閑	0
関	0	FP	橋本	0
西窪	1	FP	辻	0

15（1）7MT（3）13

○……すばらしい試合だった。先取点は中央があげたが、法政は5分青山のゴールを口火に連続5点優位に立った。中央も粘り、上村西窪らが反撃、後半3分タイ（7－7）のあと4分大熊、6分上村。10分には11－8と一気に相手を突き放すチャンスをつかんだ。

ところが、このあと法政GK柴田（オリンピック候補）の堅守にあって10分間無得点に封じられたばかりか、じわじわと追いあげられ、21分12－11から24、25分村田に2点を奪われて、せっかくのリードを失った。残り2分互いに死力をつくし、中央は28分30秒13－14としたが、法政は29分20秒村田がダメ押し、さしもの激斗にケリ

をつけた。

▽同2部
順天堂 19—17 関東学院
国士館 20—13 東海
駒沢 14—9 東京教大
明星 21—10 東京学芸大
▽女子
東女体大 8（4—1 4—1）2 東京学芸大

5部で東京経大優勝

◇第11日（10月24日）
▽男子3部
千葉工大 10（分）10 東京工大
成蹊 24—18 青山学院
立教 16—5 都立大
横浜商大 18—15 防衛大
▽同4部
千葉大 9—6 上智
専修 24—17 千葉商大
東大 24—10 茨城大
武蔵工大 18—15 神奈川大
▽同5部順位決定数・11～12位
和光 16—10 東邦
・9～10位
東京写真大 15—11 東京理科大
・7～8位
武蔵 21—17 明治学院
・5～6位
亜細亜 13—10 横浜市大
・3～4位
一橋 11—10 独協
・首位決定戦
東京経大 16—11 日本工業大

【5部最終順位】①東京経大②日本工業大③一橋④独協⑤亜細亜⑥横浜市大⑦武蔵⑧明治学院⑨東京写真大⑩東京理科大⑪和光⑫東邦⑬東京農工大。群馬大、山梨大は不参加。

日体、優勝圏外へ去る
早稲田は後半にたたみかけ

◇第12日（10月26日）
▽男子1部
明治 24（12—4 12—13）17 慶応
日大 10（4—4 6—6）10 芝浦工大
引き分け
早稲田 18（12—11 6—4）15 中央

得	【中央】		【早大】	得
0	柴田	GK	山田章	0
0	田村	GK	阪本	0
2	松本	FP	脇若	5
0	上村	FP	山高	2
0	松下	FP	川畑	4
0	佐野	FP	菊池	5
4	大熊	FP	明石	0
5	藤本	FP	鈴木	1
1	戸田	FP	山田克	1
2	蒲生	FP	泉	0
0	関	FP	北里	0
1	西窪	FP	洞ヶ瀬	0

18（5）7MT（1）15

○……早稲田がわずかに押し気味だったが、中央が後半11分蒲生（オリンピック候補）のゴールで13—13とし、まったく勝負の行方は判らなくなった。

しかし、早稲田は11分40秒の7MTを脇若が決めて一息、さらに14分脇若、16分山高とたたみかけて16—13としたのが大きかった。

中央は、前半にも二度、要所で同点に追いつきながら、その直後に失点する守りの不手際があり、2連覇の希望を失った。

攻撃力は互角だったが、勝負を決めたのはやはり守備力。早稲田が、粘り強さを身につけてきたのが目立った。

今季最大のヤマといわれるにふさわしい大型の好試合。

法政 16（10—7 6—7）14 日体

得	【日体】		【法政】	得
0	斉藤将	GK	柴田	0
0	奥川	GK	森田	0
6	喜井	FP	矢島	1
2	橋本	FP	高橋	0
1	中山	FP	大西	1
0	竹本	FP	上滝	1
1	菅野	FP	村田	6
4	斉藤幸	FP	青山	3
0	坂本	FP	阿部	4
0	大房	FP	古関	0
0	後川	FP	橋本	0
0	半田	FP	辻	0

16（2）7MT（5）14

○……前半、村田、上滝、阿部らで優位に立った法政は、後半日体の反撃を受けて、いちどは1点差に詰められたが、GK柴田の立ちなおりと、9分青山、13分大西が気力にあふれた攻撃でゴールを奪ってピンチを脱し、逃げ切った。

日体は、たての突進ばかりを繰り返し、しかも凡失が目立ち、国体（茨城）帰りに立ち寄ったOBやOGをがっかりさせた。

▽同2部
国士館 17—13 順天堂
東海 19—16 関東学院
駒沢 20—14 東京学芸大
▽女子
東京教大 6（3—1 3—4）5 日女体大

得	【日女】		【教大】	得
0	田草川	GK	坂梨	0
0	高田	FP	名賀	0
1	渡辺	FP	白鳥	0
2	前島	FP	土屋	2
0	青木	FP	中島	0
1	竹内	FP	神宮	0
0	玉那覇	FP	西山	0
1	鈴木	FP	吉本	0
0	炭谷	FP	菊地	0
0	川野	FP	坂本	2
0	山崎	FP	清水	2

6（0）7MT（0）5

日体 15（6—4 9—2）6 東京学芸大

得	【学芸】		【日体】	得
0	高橋	GK	長谷川	0
0	寺井	GK	小林	0
0	伊藤	FP	松本	5
3	永沢	FP	坂上	0
1	斉藤	FP	坂本	4
0	星野	FP	菅井	1
0	奈倉	FP	小田	1
0	前田	FP	林	1
1	山田	FP	藤山	1
1	安藤	FP	岩木	2
0	斉藤	FP	門田	0
		FP	口水	0

15（2）7MT（0）6

法政、前半のリード空し

◇第13日（10月27日）
▽男子1部＝最終日
芝浦工大 21（11—4 10—4）8 慶応
明治 18（9—3 9—11）14 日大
早稲田 15（5—9 10—5）14 法政

得	【法政】		【早大】	得
0	柴田	GK	山田章	0
0	森田	GK	阪本	0
1	矢島	FP	菊池	2
0	高橋	FP	脇若	4
1	大西	FP	川畑	4
2	上滝	FP	山田克	2
5	村田	FP	山高	2
3	青山	FP	明石	0
2	阿部	FP	鈴木	0
0	古関	FP	泉	1
0	橋本	FP	洞ヶ瀬	0
0	辻	FP	北里	0

（審・藤原、高野）

15（2）7MT（2）14

○……見事な早稲田の逆転勝ち。4点を追う早稲田は後半一気にスパート、あっという間にタイへ持ちこんだが、法政は11、14分上滝の活躍で12—10、早稲田に再度痛手を与えたとみえた。ところが早稲田は15分川畑、16分山高で追いつき、19分の7MTを脇若が決めて逆転、20分サイドから山田克、24分菊池が豪快に決め15—12とした。法政も粘り24分阿部で13—15、40秒後、大歓声のなかで村田が7MTをつかんだ。しかし、GK山田の好守は、村田の巧技を阻み、この美技が優勝へ大きく貢献するところとなった。

○……前半は村田の絶妙な配球を軸に完全な法政ペース、その多彩な攻撃でスタンドを魅了したが、後半は早稲田の激しい攻撃が〝主役〟。ハンドボールの醍醐味を満喫させる好試合だった。

日体 18（11—9 7—7）16 中央

得	【中央】		【日体】	得
0	柴田	GK	斉藤将	0
0	田村	GK	奥川	0
0	松本	FP	喜井	3
2	上村	FP	橋本	4
0	松下	FP	中山	1
1	佐野	FP	竹本	0
5	大熊	FP	菅野	3
0	藤本	FP	斉藤幸	4
1	戸田	FP	坂本	2
4	蒲生	FP	大房	0
1	関	FP	後川	1
2	西窪	FP	半田	0

18（1）7MT（5）16

○……大あじな一戦。後半10分日体は15—9と開いたものの、守りが雑で中央の反撃にあい、26分には17—16まで差がつまった。中央も、優勝を逃したためか、攻守に

ハリがなく、スコアの割に盛上らなかった。

▽同2部=最終日

国士舘 28―17 関東学院
駒　沢 14―11 明　星
東京教大 16―13 東京学芸大

関東学生秋季（男子1部）

	早	法	体	中	明	芝	日	慶	P	勝	分	負	差
①早稲田	…	○	○	○	○	○	○	○	14	7	0	0	
②法　政	●	…	○	○	○	○	○	○	12	6	0	1	
③日　体	●	●	…	○	○	○	○	○	10	5	0	2	
④中　央	●	●	●	…	○	○	○	○	8	4	0	3	
⑤明　治	●	●	●	●	…	○	○	○	6	3	0	4	
⑥芝工大	●	●	●	●	●	…	△	○	3	1	1	5	—33
⑦日　大	●	●	●	●	●	△	…	○	3	1	1	5	—44
⑧慶　応	●	●	●	●	●	●	●	…	0	0	0	7	

【2部順位】①国士舘7戦全勝②駒沢6勝1敗③明星5勝2敗④東京教大4勝3敗⑤順天堂2勝5敗（得失点差—11）⑥東京学芸大2勝5敗（—22）⑦東海2勝5敗（—14）⑧関東学院7敗

日体、後半なかばで逆転

▽女子=最終日

日体 10（4―4, 6―5）9 東女体大

補	得	【日体】		【東女】	得	補
0	0	長谷川	GK	鍋田	0	0
0	0	小林	GK	梶原	0	0
0	1	松本	FP	西田	3	2
0	1	坂上	FP	赤岸	0	2
0	0	菅井	FP	篠倉	0	2
0	3	坂本	FP	橘	2	0
0	1	小田	FP	寺田	0	0
0	1	林	FP	野口	2	0
2	2	藤山	FP	三沢	2	0
0	1	岩本	FP	高須賀	0	0
0	0	門田	FP	松村	0	0
0	0	藤井	FP	中田	0	0
2	10	（1）	7MT	（1）	9	6

【注】テーブル中の「補」は本誌調べによるアシスト。

○……昨秋は学芸大を含めて三校同率、今春は両校同率。どうしても結着をつけたいところ。

前半は東女が、西田の好リードから思い切りのよい攻撃で先行、前半終了前タイにされたが、後半に入ってからも3分橋、4分には西田―赤岸―野口とすばらしいパスプレーで加点、日体を圧した。

ところが10分をすぎる頃から動きに疲れがのぞきはじめこの機を待っていたかのように日体の速攻が爆発、10分7―7。さらに日体は12分以降、フリースローからたてつづけに3点をもぎとり10―7とし、追いすがる東女を辛くもかわして久々の単独優勝を決めた。

【順位】①日体4戦全勝②東京女体大3勝1敗③東京学芸大2勝2敗④東京教大1勝3敗⑤日女体大4敗。

★優秀選手

（男子）			（女子）		
K 柴田	（法）	③	K 鍋田	（東）	②
F 脇若	（早）	④	F 坂本	（日）	②
菊池	（早）	③	藤山	（日）	②
村田	（法）	④	林	（日）	初
阿部	（法）	初	松本	（日）	③
松木	（中）	②	西田	（東）	④
大熊	（中）	初	永沢	（学）	初

〈数字は受賞回数〉

3部で千葉工大2度目

◇第14日（10月29日）

▽男子3部=最終日

立　教 18―7 横浜商大
青山学院 28―18 東京工大
千葉工大 15―13 成　蹊
防衛大 30―9 都立大

【順位】①千葉工大6勝1分②成蹊6勝1敗③青山学院5勝2敗④立教・横浜商科大3勝4敗⑥東京工大2勝1分4敗⑦防衛大2勝5敗⑧都立大7敗

◇第15日（10月30日）

▽同4部=最終日

茨城大 21―20 専　修
千葉大 11―10 武蔵工大
東　大 26―22 千葉商大
上　智 25―8 神奈川大

【順位】①武蔵工大5勝1分1敗②東大5勝2敗③専修4勝2分1敗④千葉大・茨城大4勝3敗⑥上智2勝1分4敗⑦神奈川大2勝5敗⑧千葉商大7敗

慶応、日大とどまる（入れ替え戦）

◇男子各部入れ替え戦（11月1日　駒沢屋内球技場）

▽4～5部

日本工業大（5部②）18―14 神奈川大（4部⑦）
東京経大（5部①）16―14 千葉商大（4部③）

▽3～4部

武蔵（4部①）27―16 都立大（3部⑧）
東大（4部②）15（延）14 防衛大（3部⑦）

▽2～3部

東海（2部⑦）22―17 成蹊（3部②）
千葉工大（3部①）16―15 関東学院（2部⑧）

▽1～2部

慶応（1部⑧）15（6―4, 9―8）12 国士舘（2部①）

得	【慶応】		【国士】	得
0	米内	GK	高橋	0
6	川崎	FP	中田	1
4	福地	FP	与那嶺	0
2	浅野	FP	大城	0
0	西	FP	仲里	0
2	西村	FP	田中	6
1	木村	FP	徳尾	1
0	矢島	FP	山本	3
0	伊牟田	FP	座間	1
		FP	屋嘉部	0
		FP	原田	0
15	（5）	7MT	（4）	12

日大（1部⑦）19（10―4, 9―6）10 駒沢（2部②）

得	【日大】		【駒沢】	得
0	上野	GK	宮越	0
0	高林	GK		
3	小宮	FP	八木	1
8	金子	FP	田辺	4
0	潮田	FP	堀本	1
2	大隅	FP	金子	1
3	新井田	FP	村上	3
1	西子	FP	加賀見	0
1	桜井	FP	上田	0
1	大塚	FP	高月	0
0	田山	FP	上田	0
0	菊地	FP		
19	（1）	7MT	（3）	10

○……史上初めていちどに2校の新一部が生まれるのでは、と注目された入れ替え戦は、38年加盟以来初めてこのチャンスをつかんだ国士舘が200名近い応援学生と横断幕を張り出して意気あげれば、47年秋加盟の駒沢も100名をこすOBや学生を集め、場内はたいへんな熱気。

しかし、試合のほうは、場なれした慶応と日大がそれぞれ巧みな試合運びで勝ち。

国士舘、駒沢は改めて一部の壁の厚さを知ったようだ。再挑戦の日に期待をかけたい。

中京、名城と引き分け

東海学生秋季リーグは、10月20日から11月10日までの8日間名古屋名古屋大学球技場で行われた。

男子1部は、中京、名城の優勝争いで新鮮味に欠けたが名城が中京に引き分ける健斗を見せ終盤で盛りあがった。しかし、優勝は得失点差で中京の9シーズン連続29度目が決まった。

女子は、新たに南山が加わり、初の5大学リーグとなったが、中京が無難に試合を進め、6シーズン連続16度目の優勝を遂げた。

今季は、常勝・中京に代って名城が2度目の優勝を飾るチャンスとみられていた。

名城の試合ぶりは好調で、攻撃守備のバランスもよく、前半の3戦をこなした。

一方、中京も名城に劣らぬチーム力で勝ち星をあげ、これまでのシーズン同よう、中京×名城戦（11月4日）に優勝がかけられた。

試合は、前半20分すぎから先行した中京を、後半になって名城が追いあげ10分6－6と互角。このあと中京が岸見でリードを奪うと名城は17、18分山本の連続ゴールで逆転、18分40秒高橋の得点で9－7とレリズムをつかんだかにみえた。

ところがディフェンスに粘りをかいて22分9－9とされ24分三宅にゴールを許し、苦境に立った。25分20秒7MT(山本)でどうにか振り出しへ戻したが、決勝点をあげることはできず、押し気味の試合を引き分けた。

この結果、両校3勝1分、得失点差は51－49とわずかに中京が上廻り最終日を迎えた。まず中京が岐阜大に28点差をつけて絶対優勢とみえたのだが、愛教大戦に臨んだ名城は激しい斗志で、不可処とも思える「30点差」に挑み、時間の経過とともにスコアが開いて、コートサイドを騒然とさせた。しかし惜しくも28点差で時間切れ、中京の優勝が決まった。3位は3シーズン連続して南山が入った。

2部は、名古屋市大が復帰してオープン参加、9校の争いから、滋賀大が三重大、愛大豊橋をおさえ優勝（本誌の調べでは5度目）した。

女子は、中京が中京女大に苦しんだ以外は楽な展開で全勝、2位は中京女と愛教大をかわした岐阜大となった。

優勝は得失点差で中京

▽男子1部

中京 26（14－5、12－3）8 名大
名城 24（13－4、11－2）6 岐阜大
中京 17（6－2、11－4）6 南山
名城 24（11－5、13－4）9 名大
南山 14（7－4、7－6）10 愛知教大
中京 28（18－4、10－2）6 愛知教大
名大 12（8－1、4－5）6 岐阜大
名城 21（13－2、8－3）5 南山
愛知教大 14（7－3、7－4）10 名大
南山 14（8－4、6－8）12 岐阜大
中京 10（6－7、4－3）10 名城 引き分け

【名城】	得
GK 杉浦	0
GK 木村	0
FP 佐藤	3
FP 田中	2
FP 山本	4
FP 杉山	0
FP 岩田	0
FP 荒駒	0
FP 西尾	0
FP 高橋	1
FP 西浜	0
FP 谷元	0

【中京】	得
GK 横山	0
GK 後藤	0
FP 妻鹿	1
FP 布垣	3
FP 岸見	3
FP 佐藤	1
FP 三宅	1
FP 伊賀	0
FP 北田	0
FP 野田	0
FP 村上	1
FP 西脇	0

（審・松井 宇津野）

10（3）7MT（2）10

愛知教大 14（8－8、6－4）12 岐阜大
中京 35（19－4、16－3）7 岐阜大
南山 12（7－7、5－4）11 名大
名城 41（20－7、21－6）13 愛知教大

中京、中京女を振り切る

▽女子

中京女 8（6－3、2－3）6 愛知教大
岐阜大 12（8－3、4－5）8 南山
愛知教大 17（8－1、9－1）2 南山
中京 3（2－1、1－1）2 中京女
中京 13（9－2、4－2）4 愛知教大
岐阜大 7（4－3、3－1）4 中京女
中京 7（5－2、2－1）3 岐阜大
中京女 16（11－3、5－1）4 南山
中京 18（9－1、9－3）4 南山
岐阜大 10（6－0、4－1）1 愛知教大

【順位】①中京4戦全勝②岐阜大3勝1敗③中京女2勝2敗④愛知教大1勝3敗⑤南山4敗

【順位】①中京4勝1分（得失点差79）②名城4勝1分(77)③南山3勝2敗④愛知教大2勝3敗⑤名古屋大1勝4敗⑥岐阜大5敗

男子2部は滋賀大勝つ

▽男子2部Aブロック

愛大豊橋 20－14 名古屋学院
愛大名古屋 19－17 名古屋学院
愛大豊橋 16－13 愛大名古屋

▽同Bブロック

三重大 21－17 静岡大
静岡大 16－15 中部工大
三重大 12－11 中部工大

▽同Cブロック

滋賀大 17－13 名古屋工大
名古屋工大 34－9 名古屋市大
滋賀大 30－7 名古屋市大

▽同7位決定リーグ

名古屋学院 13－9 中部工大
名古屋学院 20－11 名古屋市大
中部工大 26－5 名古屋市大

▽同4位決定リーグ

愛大名古屋 21－18 静岡大
名古屋工大 24－16 静岡大
名古屋工大 14－11 愛大名古屋

▽同決勝リーグ

愛大豊橋 15（分）15 三重大
滋賀大 18－11 三重大
滋賀大 20－12 愛大豊橋

【2部最終順位】①滋賀大②三重大③愛知大豊橋④名古屋工大⑤愛知大名古屋⑥静岡大⑦名古屋学院⑧中部工大⑨名古屋市立大

全日本総合へ女子学生3校

日本協会は、12月11日から東京体育館で開く第26回全日本総合選手権の女子代表のうち、「次年度国体開催地代表」の枠（1）が、三重協会から返上されたため、この分を全日本学連へまわした。

（12頁関連記事）

本誌は1月は休刊。次の発行は50年2月1日です。

日本のハンドボールを世界の最高峰へ！

（協賛者御芳名・順不同）

☆★☆★☆★☆ 海外トピックス

――杉山　茂――
（NHK運動部）

ステンツェル（ユーゴ）、西独監督に

今月お伝えする最大のニュースは、このところ不振の西ドイツ男子ナショナルチーム監督にユーゴ人・ステンツェル氏が登用されたことだ。

西ドイツは、有名なヴィック監督がミュンヘンオリンピックで優勝を逸したばかりか、メダルもとれず6位に終った責をとり辞任、あとをついたケスラー監督もパッとせず、今春の世界選手権ではベストエイトからすべり落ちた。

国技と自負し、熱狂する西ドイツファンは、この低調を攻撃、ジャーナリストたちも同調したため西ドイツ協会は、ついに、ユーゴナショナルを率いてミュンヘンオリンピックに優勝を飾ったステンツェル氏の起用に踏み切ったものだ。

ステンツェル氏は、ミュンヘン後、西ドイツの強豪クラブ「フェニックス・エッセン」（全国リーグ北地区）の監督に迎えられていたこともあり、同氏のほうから西ドイツ協会へ売りこんだ、とも云われている。

いずれにせよ、伝統の西ドイツが、いかにスランプとはいえ、外国人監督を迎えなければならないとは、昔日を知るオールドファンにとっては考えられぬできごとだろう。

年額（報酬）邦貨480万円といわれるステンツェル新監督の初指揮はバルティックカップ（＝本誌既報）で、この時は4位、つづくスイス国際（＝後掲）は最下位。重症の西ドイツを〝鬼〟と云われる同監督がモントリオールまでに、どう建て直すか興味深い。

男女ともチュニジア優勝
～アフリカ選手権～

先月号で、順位だけをお報せした第1回アフリカ選手権（9月、チュニス）の詳報が入った。

男子（6ケ国参加）は、国際キャリアのあるチュニジアが予想どおり攻守に一日の長を示して全勝優勝した。2位は、これまであまり国際実績が伝えられていないカメルーン。

女子（4ケ国参加）も、チュニジアが相手国を一桁の得点におさえるなど格段の力を示し首位となった。3位のウガンダはIHF未加盟国。

なお、エジプトは男女ともチュニジア戦を棄権、順位からはずされた。

▽男子リーグ

チュニジア 17－8 カメルーン
エジプト 15－13 セネガル
トーゴ 31－13 マダガスカル
カメルーン 23－13 セネガル
トーゴ 11－10 エジプト
チュニジア 19－7 マダガスカル
カメルーン 14－10 トーゴ
チュニジア 棄権 エジプト
チュニジア 12－7 セネガル
セネガル 18－7 マダガスカル
チュニジア 18－11 トーゴ
カメルーン 13－12 エジプト
セネガル 19－15 トーゴ
カメルーン 22－16 マダガスカル
エジプト 18－13 マダガスカル
【順位】①チュニジア②カメルーン③セネガル④トーゴ⑤マダガスカル

▽女子リーグ

チュニジア 13－9 セネガル
エジプト 9－7 ウガンダ
チュニジア 23－4 ウガンダ
エジプト 9（分）9 セネガル
セネガル 16－5 ウガンダ
チュニジア 棄権 エジプト
【順位】①チュニジア②セネガル③ウガンダ

東ドイツ、若手で優勝
～オーストリア国際～

日本遠征から帰った東ドイツはその後も、精力的な動きをつづけ10月上旬リンツ（オーストリア）で開かれたオーストリア・トーナメントにもケーラート、グルナーら若手中心のチームを特別参加させ順当に優勝した。

地元オーストリアが、ブルガリア（世界11位）を接戦で降したのが注目される。

東ドイツ 17－16 デンマーク
オーストリア 17－16 ブルガリア
デンマーク 21－12 ブルガリア
デンマーク 17－12 オーストリア
東ドイツ 27－21 ブルガリア
東ドイツ 20－14 オーストリア
【順位】①東ドイツ②デンマーク③オーストリア④ブルガリア

ハンガリー順当勝ち
～スイス国際大会～

中堅4ケ国を集めたスイス国際トーナメントが10月行われ、ハンガリーがスイスの食い下りにあって引き分けたほかは、コバクス、S・パスらの活躍で首位となった。

西ドイツは、ステンツェル監督による新メンバーで臨んだがその顔ぶれは、GKがホフマン、ドグス、ロウエル、FPがメイネケ、ガイゼル、スクラグヘック、ブリ

デンボーム、ベックリング、エムリッヒ、クラマー、ドン、ラチェン、フィッシャー、ボクゾコウスキー、エングラー、ベクラーで、よほどの西ドイツ通でも、大半の選手の経歴などをご存知のかたは少ないだろう。

スイス 21（13−10 8−11）11 アイスランド
ハンガリー 17（9−5 8−7）12 西ドイツ
アイスランド 18（10−12 8−3）15 西ドイツ
ハンガリー 18（10−9 8−9）18 スイス
ハンガリー 13（15−10 16−4）14 アイスランド
西ドイツ 15（8−10 7−3）13 スイス

【順位】①ハンガリー②アイスランド③スイス④西ドイツ

ハンガリーの好調つづく
惜しかったポーランド

東欧勢によるマルティン（チェコ）カップが5ケ国6チームを集めてリーグ戦で行われ、ハンガリーが、スイス国際（＝前掲）につづき4勝1敗で優勝した。ハンガリーに土をつけたポーランドはチェコに敗れ4勝1敗、優勝は得失点差で決められた。ハンガリーは前号でお伝えしたサマー・トーナメント以来3大会連勝と好調である。

ポーランド 22−20 ハンガリー
ソビエトJ 20−17 ブルガリア
チェコJ 24−15 チェコ
ハンガリー 23−17 チェコ
チェコJ 25−15 ブルガリア
ポーランド 18−17 ソビエトJ
チェコ 18−15 ソビエトJ
ハンガリー 19−17 チェコJ
ポーランド 24−23 ブルガリア
ポーランド 23−18 チェコJ
チェコ 29−17 ブルガリア
チェコ 14−13 ポーランド
チェコJ 26−19 ソビエトJ
ハンガリー 27−14 ブルガリア

【順位】①ハンガリー（得失点差21）②ポーランド（8）③チェコ④チェコJ（ジュニア）⑤ソビエトJ（ジュニア）⑥ブルガリア

ラブルニッチも西独へ　ユーゴの星・ラザレビッチが西ドイツのクラブ入りしたことは、本誌でもお報せしているが、同選手と〝LL砲〟の名で売った相棒ラブルニッチ（左腕、昨秋来日）もこのほど、西ドイツ西部地域リーグ「TUS・デルスクラグ」クラブに迎えられ、早速試合に出場、公式戦6試合で44得点をマーク、同リーグ個人得点のトップを走っている。同クラブは、上手くいけば来年全国リーグ入り出来る。

パレスチナにも協会　パレスチナの国家建設、国土問題が話題となっているが、パレスチナにはすでにハンドボール協会がある。これはクウェートに本部が置かれているもので、昨年3月マブロック会長名で出された文書によれば「いちち活動を停止していたものを再発足させた」という。

IHFの加盟国　本誌前号で既報のとおり、IHF（国際ハンドボール連盟）は、10月の総会で、新たに9ケ国の加盟を認め63ケ国を傘下におさめることとなった。

このほか、イラクとオーストラリアの準加盟がこのほど正式に発表されたほか、中国など21の国でハンドボールが行われていると伝えられる。

IHF加盟国（10月31日現在）は別表の通りだが、アフリカが20ケ国に増え、ヨーロッパの25ケ国へ〝肉薄〟していることと、アジアの急成長が大いに目立つ。

注目の地域連盟の組織については、今のところIHFが公式的な指示を発表していないため白紙。

ヨーロッパ・カップ

ヨーロッパ各国のチャンピオンチームによる第15回ヨーロッパカップは10月末に開幕、1回戦9カードが行われ、ASKV・フランクフルト（東ドイツ）にWK・S・S・ヴロクラウ（ポーランド）が第1戦12−18、第2戦17−18と善戦、注目された。フランクフルトは、9月来日したピーチュ、エンゲルが主力。

このほか、ステアウア・ブカレスト（ルーマニア）がイスラエル代表のハポエル・レコボットを27−12、24−15で一蹴したほか、来春訪日が予定されるバロンマノス・グラノラース（スペイン）もCSI・R・ロベレト（イタリア）に楽勝。

グンメルスバッハ（西ドイツ）などシードチーム登場の2回戦は11月末に終るが、早くもMAI・モスクワ（ソビエト）とステアウア・ブカレストが顔合せすることになり、ファンの話題を集めている。

また、第14回女子ヨーロッパカップも近く開幕するが、前回の優勝者・SCライプチヒ（東ドイツ）が出場辞退したのは、世界女子選手権予選（対ブルガリア）に全力を注ぐためと伝えられた。

IHF加盟国

【アジア地域】
日本
朝鮮民主主義人民共和国
韓国
ホンコン
インド
イスラエル
クウェート
レバノン
シリア
ヨルダン
サウジアラビア
台湾

【ヨーロッパ地域】
ベルギー
ブルガリア
デンマーク
西ドイツ
東ドイツ
ファロー諸島
フィンランド
フランス
イギリス
アイスランド
イタリア
ユーゴスラビア
ルクセンブルグ
オランダ
ノルウェー
オーストリア
ポーランド
ポルトガル
ルーマニア
スウェーデン
スイス
ソビエト
スペイン
チェコスロバキア
ハンガリー

【アフリカ地域】
エジプト
アルジェリア
エチオピア
ダホメ
コートジボアール
ギニア
カメルーン
コンゴ
リビア
マダガスカル
マリ
モロッコ
セネガル
ナイジェリア
シプルス
トーゴ
オート・ボルタ
タンザニア
チュニジア
ザイール

【アメリカ地域】
アルゼンチン
ブルジル
カナダ
キューバ
メキシコ
アメリカ

【準加盟国】
イラク（アジア）
オーストラリア（オセアニア）

最後の高校男女　伝統の大阪に栄冠

茨城国体

第21回国民体育大会ハンドボール競技は，「水と緑のまごころ」をキャッチフレーズに10月21日から25日まで，茨城県水海道市・水海道一高球技場を主会場にして行われた。来年度以降「少年の部」設置にともない史上最後となる高校は，奇しくも，第1回（昭21）同よう大阪の男女優勝でしめくくられ，注目の一般は予想どおり実業団を送りこんだ愛知（男）と茨城（女）が勝った。また，教員は大阪の優勝。天皇杯（男女総合得点）は3部門1位の大阪，皇后杯（女子総合）は地元茨城が手中にした。

茨城国体

教員も大阪　一般は愛知（大同製鋼）と茨城（日本ビクター）

一般男子（30チーム）

神奈川、福島に逆転勝ち　山口は延長で熊本破る

▽1回戦

山口（徳山ク）26（3—3、4—1、11—11、8—8）23 熊本（熊本トヨタ自動車）

神奈川（全神奈川）20（11—8、8—11）19 福島（SGク）

石川（金沢市役所）28（18—8、10—7）15 奈良（奈良ク）

和歌山（和商ク）24（12—8、12—5）13 山形（山形ク）

茨城（自衛隊勝田）18（9—9、9—4）13 香川（瀬戸ク）

北海道（函館有斗ク）19（13—9、6—9）18 山梨（日川ク）

三重（本田技研鈴鹿）40（24—4、16—4）8 福岡（ブリヂストンタイヤ）

東京（三景）41（24—8、17—5）13 青森（七戸ユニオン）

岐阜（二和家具）22（14—5、8—1）6 福井（北陸電力）

広島（三菱レイヨン大竹）25（14—8、11—8）16 長崎（佐世保ク）

群馬（甘楽ク）19（11—5、8—9）14 京都（京都ク）

埼玉（大崎電気）24（12—4、12—1）5 愛媛（住友化学菊本）

富山（氷見ク）23（11—9、12—9）18 兵庫（神戸製鋼）

栃木（栃木AOK）35（23—3、12—4）7 宮城（東北学院OB会）

○……注目の埼玉×愛媛は、埼玉が元気のない愛媛を一気に押しつぶし、前半25分で12—0。

神奈川×福島は福島が先手をとって進んだが神奈川は15分に逆転、その後は立ち場を代えて逃げ切った。

北海道×山梨ももつれた。山梨が後半10分12—9とリードしたが、北海道は15分から21分までに連続8点をあげる反撃、追いすがる山梨をかわした。

山口×熊本は、熊本が終盤3点のハンデをはね返して延長へ入ったが、山口は延長前半、明石の活躍で優位に立った。

富山×兵庫も激戦。富山は要所で得た5本の7MTを実らせた。

東京、岐阜を突き放す　茨城、和歌山に敗れる

▽2回戦

愛知（大同製鋼）25（13—7、12—7）14 山口

神奈川 20（11—4、9—9）13 石川

和歌山 15（8—5、7—5）10 茨城

三重 34（21—5、13—1）6 北海道

東京 21（18—4、8—8）12 岐阜

広島 23（14—7、9—8）15 群馬

埼玉 19（12—4、7—5）9 富山

大阪（湧永薬品）28（15—4、13—3）7 栃木

○……東京×岐阜は、前半、岐阜が伊丹の活躍で食い下り、後半に興味をつないだが、東京は速攻と巧みな変化攻撃で10分16—9、あっさり突きはなした。

神奈川×石川は後半10分まで八たびタイの接戦、このあと神奈川は植木、吉沢が交互に得点、20分15—11とし、メドをつけた。このほかの6試合は、茨城が和歌山に敗れた以外、順当な結末だった。

愛知、三重ら順当勝ち

▽準々決勝

愛知 23（13—8、10—2）10 神奈川

三重 22（15—6、7—2）8 和歌山

東京 23（16—6、7—6）12 広島

大阪 18（8—1、10—6）7 埼玉

○……大阪×埼玉は、埼玉の立ち直りを占う意味で注目されたが、前半なかばから地力の差があらわれはじめ、特に後半になると大阪は穂積（オリンピック候補）の活躍で一方的に試合を進めた。

東京×広島は、後半10分まで10—8とせりあったが、東京はこのあと相手のパスミスから一気に攻撃をしかけて勝利を確定づけた。

他の2試合は、前半なかばで勝負がついてしまった。

愛知、巧みに主導権握る

▽準決勝

愛知 18（10—8、8—3）11 三重

得	【愛知】		【三重】	得
0	柳川兄	GK	細野	0
0	倉谷	GK	牧原	0
0	野田	FP	勝田	0
3	藤中	FP	佐藤	1
0	加藤	FP	田上	2
1	中井	FP	新実	5
4	桜花	FP	柳	2
5	松原	FP	長谷川	1
1	花村	FP	加藤	0
0	守田	FP	宮川	0
4	柳川弟	（審・高橋、佐分）	矢野	0
18	（2）	7MT	（0）	11

○……前半20分まで三重のディフェンスは、積極的な動きをみせ、5人の全日本選手を持つさしもの愛知も攻めあぐんだが、残り10分三重の動きがやや鈍くなったスキを見逃さず、愛知は一気に6点、主導権を握った。

三重も、後半15分8—10まで盛り返したが、愛知は余裕があり危気なかった。

（森　恭一）

大阪 15（7—6、8—5）11 東京

得	【大阪】		【東京】	得
0	今井	GK	佐藤	0
0	福井	GK	小林	0
0	森	FP	佐々木	4
3	戸田	FP	加藤	1
1	穂積	FP	高梨	1
3	津川	FP	内藤	1
2	木野	FP	高森	0
6	高橋	FP	山村	0
0	藤井	FP	川島	4
0	田中	FP	喜田	0
0	市原	（審・森、佐々木）	大森	0
15	（3）	7MT	（2）	11

○……東京は、大阪の動きが固いスキをついて先行したが、20分大阪は7MTで同点のあと、高橋の

連続ゴールと戸田で優位に立ち、その勢いを後半にも持ちこんで10分12—7とリードした。

東京も必死に食い下ったが大阪の巧みな試合運びにかわされた。

国内最高レベルの選手を揃え、見応えのある技を応酬したが、東京にとっては、前半終了間際のミスが悔まれよう。（佐分正典）

▽3位決定戦

三重 16（9—4, 7—6）10 東京

○…三重が好調な滑り出しを見せたのに対し、東京はどこか元気がない。25分7—2と一方的にスコアが開き、東京は後半20分11—13まで盛り返したが大勢をくつがえすには至らなかった（徳前啓人）

大阪、前半の貪攻たたる

▽決勝

愛知 14（4—0, 10—6）6 大阪

得	【愛知】		【大阪】	得
0	柳川兄	GK	今井	0
0	倉谷	GK	福井	0
2	條中	FP	穂積	0
2	中井		津川	1
3	花輪		木野	1
2	松原		高橋	4
4	柳川弟		森	0
1	野田		戸田	0
0	加藤		田中	0
0	北村		市原	0
0	守田	（審・岡前、佐野）	藤井	0
14	（1）	7MT	（2）	6

○…両者とも速攻が出せず、スローテンポな試合だったが、特に大阪は、再三の好機を、相手GK柳川兄の好守と自信にあふれた大同デイフェンスに阻まれ、前半ノースコア。おそらくこれはチーム結成以来初めての記録だろう。

全日本選手たちの手固いポイントでリードした愛知は後半も楽な試合ぶり。大阪は後半4分ようやく7MT（高橋）で1点目をあげ、これを境に、強豪同士らしい激しい内容となったが、大阪は得点が散発的。自信にあふれた愛知の文句のない勝利だった。愛知は2連勝4度目、大同製鋼は2連勝。（山内孝雄）

年次優勝都道府県

	〈天皇杯〉	〈皇后杯〉
③昭23	大阪	大阪
④	大阪	岡山
⑤	大阪	岡山・大阪
⑥	岡山	岡山
⑦	愛知	愛知
⑧	北海道，大阪	北海道
⑨	大阪	大阪
⑩	愛知	福岡
⑪	愛知	福岡
⑫	愛知	愛知
⑬	大阪	茨城
⑭	大阪	宮城，福岡
⑮	愛知	愛知
⑯	東京	愛知，茨城
⑰	愛知	熊本
⑱	△山口	△山口
⑲	△新潟	東京
⑳	△岐阜	熊本
㉑	大阪	熊本
㉒	△埼玉	△埼玉
㉓	熊本	熊本
㉔	△長崎，埼玉	熊本
㉕	大阪	大阪
㉖	△和歌山	秋田，熊本
㉗	△鹿児島	熊本
㉘	△千葉	△千葉
㉙昭49	大阪	△茨城

・△印は開催県
・両杯は第3回から制定

一般女子（10チーム）

福島、延長で惜敗

京都、石川を降す

▽1回戦

山口（徳山高OG）16（9—3, 7—5）8 香川（香川ク）

栃木（日立栃木）24（12—0, 12—2）2 北海道（室蘭東高OG）

愛知（ブラザー工業）9（4—5, 3—2 : 0—1, 2—0）8 福島（東北ムネカタ）

京都（京都ク）10（4—4, 3—3 : 3—0, 0—1）8 石川（小松OG）

○…福島が勝てる試合をみすみす失った。特に後半23分7—6としながら追いつかれ、そのあとの7MTを落したのは悔やまれよう。愛知は延長後半、宮崎の連続得点で逆転勝ち。

京都×石川は好試合。後手にまわっていた石川は後半20分5—6から貝野、山際の得点で逆転、逃げこむかと思えたが、京都も残り35秒福田が同点シュート。延長後は一進一退から、京都が人見で勝ちこし、森本がダメを押して勝った。

山口×香川は、山口が前半15分6—2とリード、そのペースを崩さなかった。栃木×北海道は栃木が速い動きで相手を振りまわし、北海道は零封をまぬがれるのがやっと。

山口、東京に食い下る

熊本、愛知をおさえこむ

▽準々決勝

東京（東京重機）17（6—4, 11—5）9 山口

三重（田村紡）16（8—0, 8—7）7 栃木

熊本（立石電機）9（5—1, 4—4）5 愛知

茨城（日本ビクター）20（7—0, 13—0）0 京都

○…激戦を期待された三重×栃木は、前半栃木の攻撃がまったく振わず、三重があっさり主導権を握った。栃木はもう少し強引さがあってよい。

熊本×愛知は、不振の愛知が後半になると、鋭い攻撃で17分5—6と迫った。熊本は残り5分となって、再びリズムをつかみ3ゴール、おさえこんだ。

山口が前年優勝の東京に食い下った。前半5分4—0と開いた時は東京の一方勝ちとみえたが、山口は高松、渡辺の好技などで粘り後半20分まで勝負の興味をつなぎとめたのは賞される。

茨城×京都は、京都が力みすぎの茨城の虚をつけば面白かったのだが、相手デイフェンスを突破するだけのスピードがなかった。

光る古佐原（東京）の攻守

▽準決勝

東京 12（6—5, 6—4）9 三重

得	【東京】		【三重】	得
0	三紙	GK	久保	0
		GK	山本	0
6	古佐原	FP	沖	0
2	市川		三毛	1
1	菊地		横山	1
0	折口		和久井	1
2	村上		金田	0
1	町田		松下	4
0	田中	（審・斉藤和、山内）	鈴木	1
			河田	1
			林	0
12	（0）	7MT	（2）	9

○…三重は立上り好調に攻めて三毛のステップシュートなどで4—2と先行、しかし、東京は苦しみながらも古佐原（全日本）の巧みなカットプレーで活路を見出しじわじわと追いあげ、21分5—4と逆転した。

後半、東京は古佐原が超美技を連続させ5分9—6、さらに市川、町田で15分11—6と三重を突きはなした。（森）

茨城 9（5—3, 4—5）8 熊本

得	【茨城】		【熊本】	得
0	渡辺	GK	森山	0
0	鈴木	GK	佐用	0
0	蓮見	FP	篠川	0
1	額賀		山下	1
2	谷沢		加子崎	0
0	滝		石井	0
3	高野		島田	0
0	川崎		蔵田	5
2	池田		植原	0
1	加藤		矢田	0
0	阿部	（審・佐々木、森）	紀野	2
9	（2）	7MT	（4）	8

○…後半10分4—8と引きはなされた熊本は15分6—8と粘りつ

き、更に16分島田（全日本）の独走が7MT（成功）と加藤の退場（2分間）を誘い一転、有利とみえた。

しかし、茨城は池田、阿部の両ベテランを柱に、このピンチを無得点におさえたばかりか、17分30秒額賀がゴールを決めて9—7、23分1点を失ったものの逃げ切った。熊本は、前半、7MTだけの得点に終わるスロースタートが響いた。緊迫の好試合。（杉山 茂）

▽3位決定戦

熊本 16（8—6、4—6、…、2—0、2—2）14 三重

茨城、後半に勝負決める

▽決勝

茨城 9（5—5、4—0）5 東京

【東京】	得	補
GK 三　紙	0	0
FP 古佐原	0	2
市　川	0	0
菊　地	1	3
折　口	2	0
村　上	2	0
町　田	0	0
田　中	0	0
7MT	(0)	
計	5	5

FP（審・千野、斉藤実）

補	得	【茨城】
0	0	渡　辺 GK
0	0	鈴　木 GK
0	2	池　田 FP
0	0	高　野
3	0	蓮　見
0	1	谷　沢
0	0	滝
1	3	加　藤
1	3	額　賀
0	0	川　崎
0	0	阿　部
	(3)	7MT
5	9	計

【注】テーブル中の「補」は本誌調べによるアシスト数。

○……前半動きの固かった茨城は後半になるとすっかり落ちつき、開始30秒加藤のミドルが決まって、いっそう余裕が生まれた。7分、9分蓮見の好配球から額賀、谷沢がゴールを決め8—5、12分加藤が押しこんだところで、コートサイドはもう〝優勝気分〟。

東京の立ちあがりはよく、前半10分3—1と先制したが、そのあとの好機を焦りからつぶし、後半、古佐原をポスト、45度と使い廻したものの、茨城の固い守りを崩せずに終った。茨城、日本ビクターとも初優勝。（杉山）

教員（10チーム）

千葉、ものいった守備力

▽1回戦（2試合）

福井 27（12—2、15—9）7 北海道（南北海道教員団）

岡山 40（19—7、21—13）20 高知

▽準々決勝

大阪（大阪イーグルス）24（6—4、18—10）14 福井

千葉 23（12—9、11—9）18 鹿児島

静岡 18（7—3、11—7）10 岩手

茨城 18（7—6、11—3）9 岡山

○……ベストフォアの顔ぶれは予想どおり。しかし、大阪、茨城の両強豪は、福井、岡山の善戦にあって楽な進出とはいえなかった。

千葉×鹿児島は前半10分2—4とされたがそのあと連続8点、優位に立った。鹿児島も平山、田之上で追いかけ、後半10分12—15、終盤に興味を残したが、守備力に上廻る千葉がどうにか逃げこんだ。

静岡の追いあげ及ばず

▽準決勝

大阪 21（21—7、9—11）18 千葉

【千葉】	得
GK 林	0
風　間	0
FP 笠　原	1
松	1
樋　口	0
稲　生	0
八　尋	1
上　坂	2
佐　藤	7
浅　原	3
氷　海	3
7MT	(0)
計	18

FP（審・遠藤、金子）

得	【大阪】
0	本　田 GK
0	広　川 GK
4	高　橋 FP
8	池　本
0	足　羽
6	安　達
0	市　田
0	河原崎
0	井　上
3	福　井
0	北　岡
(1)	7MT
21	計

○……両者とも速攻を主とした展開。しかし、千葉にミスが目立ち大阪はそこからチャンスをつかんで着々と加点、守ってはGKの好守で千葉をおさえた。

後半も同じようなペースで進み17分大阪は19—10と開いた。千葉は最後まで試合を捨てず、残り1分18—20としたが、時すでに遅かった。（佐分）

茨城 14（7—2、7—8）10 静岡

○……攻撃の歯車がかみあわない茨城の攻守をついて、静岡は再三チャンスをつかんだが、茨城はGK大村の好守で辛くも失点を防ぎ序盤を乗り切った。前半なかばから茨城はようやく攻撃が整い20分5—1と先行、後半も10分までに4点をあげた（11—4）。

静岡は後半15分すぎから小林がよく動いて一人で連続6点をマークして追いあげたが及ばず、結果的には前半16分間無得点の拙攻を悔やむこととなった。（三枝慶彦）

【静岡】	得
GK 山　口	0
富　田	0
FP 入　山	1
杉　山	0
寺　田	0
井　上	0
竹　内	0
矢　吹	2
久保田	0
小　林	7
板　倉	0
7TM	(0)
計	10

FP（審・高橋、佐分）

得	【茨城】
0	大　村 GK
0	谷　萩 GK
2	池　田 FP
0	立　原
3	中　村
3	塚　田
3	高　野
2	大　川
0	福　永
1	松　金
0	中　山
(1)	7TM
14	計

▽3位決定戦

千葉 17（10—8、7—5）13 静岡

○……千葉は、氷海を中心によくボールを廻したが、最後の詰めが甘く、チャンスの割に得点をあげられなかった。静岡はベテラン久保田をはじめ、まとまりのある攻撃で、好感のもてる試合ぶりだった。（金子永治）

鋭さ欠いた茨城教員

▽決勝

大阪 16（6—1、10—4）6 茨城

【茨城】	得
GK 大　村	0
谷　萩	0
FP 池　田	1
立　原	1
中　村	2
塚　田	0
高　野	1
大　川	0
福　永	1
松　金	0
中　山	0
7MT	(1)
計	6

FP（審・佐野、岡前）

得	【大阪】
0	本　田 GK
0	広　川 GK
2	高　橋 FP
3	池　本
6	安　達
3	福　井
1	市　田
0	足　羽
1	北　岡
0	河原崎
0	井　上
(4)	7MT
16	計

○……試合巧者の大阪は終始ペースを崩さず、好機は確実に得点、つねに優位をキープ、貫禄勝ち。

立ちあがりは、両GKと美技の応酬で緊迫、たがいに7MTによる得点だけだったが、前半20分すぎから、大阪の攻撃が、茨城を上廻り、後半5分9—2と開いた。

大阪も、速攻におけるパスミスが多く絶好調といえなかったが、茨城のオフェンスはそれ以上にシャープさを欠いたのは反省されるべきだ。17分大阪が13—4と開いて、決勝にしては迫力を欠く内容となった。

なお、大阪がストーリング2回による退場を課せられたのは珍しい記録。大阪は2連勝8度目。

（岡村昭二）

高校男子（10チーム）

福岡、山口に敗れる波乱

▽1回戦（2試合）

山口（下関中央工）18（12—4、6—5）9 愛媛（選抜）

愛知（選抜）12（5—5、7—6）11 富山（選抜）

▽準々決勝

山口 13（5—2、8—7）9 福岡（選抜）

○……愛知×富山はスケールの大きい好試合となったが、僅差で愛知が勝った。山口は秀れた攻撃力で愛媛を圧倒。

得	【山口】		【福岡（選抜）】	得
0	佐野	GK	原嶋（久留米工）	0
0	井本	GK	伊藤（若松）	0
6	飯山晃	FP（審・森、佐々木）	長野（久留米工）	1
1	山東		秋吉（久留米工）	3
0	田村		椿原（久留米工）	1
1	河村		中島（久留米工）	0
1	岡田		松延（小倉西）	0
4	赤羽		関川（小倉西）	0
0	溝部		神野（小倉西）	2
0	島中		日野（若松）	1
0	飯山修		武藤（久留米工）	1
13	（1）	7MT	（1）	9

大阪（全大阪）16（9－6、7－1）7 山梨（塩山商）

北海道（函館有斗）8（3－6、5－1）7 茨城（選抜）

愛知 11（5－7、6－3）10 秋田（湯沢）

○……全日本高校1位の久留米工、同2位の小倉西で固めた福岡が敗れた。両校の所在地が離れていたため、チーム練習は充分でなかったそうだが、やはりここは山口の気力を賞すべきだろう。

山口は前半15分2－2のあと、みごとなゆさぶりで福岡守備陣を崩し3点連取、後半もなかばすぎ再びラッシュ、20分11－6とする巧い試合運びだった。福岡も必死の反撃を試みたが、2点差に迫るのが精いっぱいだった。

愛知×秋田は熱がこもった。秋田の由利を中心とする後半の反撃はみごとだったが前半、愛知の速攻にゴールを割られたのが響いた。茨城×北海道は茨城が前半拙攻して痛い星を落とした。

高校の部歴代優勝チーム

	〈男子〉	〈女子〉
①昭21	大阪（豊中中学）	大阪（豊中高女）
②	大阪（天王寺）	大阪（茨城高女）
③	大阪（天王寺）	大阪（春日丘高女）
④	大阪（天王寺）	岡山（岡山一）
⑤	栃木（足利）	大阪（春日丘）
⑥	愛知（桜台）	岡山（青陵）
⑦	愛知（桜台）	愛知（稲沢）
⑧	愛知（桜台）	愛知（稲沢）
⑨	熊本（済々黌）	大阪（寝屋川）
⑩	愛知（桜台）	福岡（明善）
⑪	愛知（桜台）	熊本（熊本市立）
⑫	愛知（桜台）	静岡（静岡城北）
⑬	富山（氷見）	茨城（水海道二）
⑭	神奈川（鎌倉学園）	熊本（熊本市立）
⑮	愛知（中京商）	愛知（半田）
⑯	兵庫（兵庫工）	茨城（水海道二）
⑰	愛知（桜台）	熊本（菊池農）
⑱	山口（徳山）	山口（徳山）
⑲	愛知（桜台）	静岡（静岡城北）
⑳	愛知（桜台）	熊本（菊池農）
㉑	東京（明星）	熊本（菊池農）
㉒	東京（明星）	栃木（栃木女）
㉓	静岡（全静岡）	熊本（菊池農）
㉔	山口（下関中央工）	愛媛（新居浜商）
㉕	大阪（全大阪）	大阪（全大阪）
㉖	山口（岩国工）	秋田（和洋女）
㉗	福岡（県選抜）	熊本（県選抜）
（特）昭48	…………	熊本（熊本女商）
㉘	東京（都選抜）	石川（小松市女）
㉙昭49	大阪（全大阪）	大阪（全大阪）

・昭48の（特）は沖縄特別国体。

▽準決勝

大阪、辛くも逃げ切る

大阪 13（6－7、7－4）11 山口

得	【大阪（選抜）】		【山口】	得
0	岡田（佐野工）	GK	佐野	0
0	奥野（富田林）	GK	井本	0
2	山本（初芝）	FP（審・佐野、岡前）	飯山晃	3
2	繰井（佐野工）		山東	1
6	奥田（桃山）		田村	0
2	吉見（桃山）		河村	4
1	源野（三国ケ丘）		岡田	1
0	河内（初芝）		赤羽	2
0	志賀（泉北）		溝部	0
0	金岡（春日丘）		島中	0
0	脇（三国ケ丘）		飯山修	0
13	（0）	7MT	（3）	11

○……両者ともセットから速いパスワークで、1点を争ったが、山口は20分過ぎからパスに乱れをみせ、大阪の速攻を許して、点差をつけられた。

後半、山口は態勢を立てなおし15分8－8のタイ、予断を許さなくした。一進一退から大阪は20分山本、21分奥田のミドルシュートで再び優位に立ち、山口の反撃を7MT2本におさえ押し切った。（小松　進）

愛知 6（2－1、1－2、1－0、2－0）3 北海道

○……ともに体育館の緊迫感に押されたのか絶好機をつぶしあい得点は最少限。愛知が1点目から2点目をあげるまで28分間、北海道が2点目から3点目をあげるまで23分間かかっている。

得	【愛知（選抜）】		【北海】	得
0	服部（名南工）	GK	三上	0
0	溝口（名南工）	GK	田中	0
3	鈴木（名城大付）	FP（審・小松、清水）	宮谷	0
0	中島（桜台）		関本	0
1	伊藤（熱田）		根本	1
1	蟹江（名南工）		藤村	0
0	隠岐（名南工）		伊藤	1
0	榊原（名南工）		阿部	0
1	坂元（名南工）		水島	1
0	鬼頭（名南工）		木村	0
0	田中（名南工）		古川	0
6	（1）	7MT	（0）	3

愛知は残り2分2－3の劣勢から得た7MTを、鈴木が決め延長へもつれこんだ。

延長に入ると愛知が押し気味、鈴木の活躍で2点をあげ、7MT（蟹江）でダメを押した。北海道は戦法がやや消極的で、惜しい一戦を落とした。（斉藤和夫）

▽3位決定戦

山口 15（8－3、7－4）7 北海道

○……前半、北海道は独得のスローペースで、ほとんどの時間、ボールをキープしたが、地力に勝る山口は、チャンスをつかむや一気の速攻でポイント、セットプレーからも相手ディフェンスをゆさぶって着々加点、追いすがろうとする北海道をかわした。（勝　繁夫）

大阪、先行の利活かす

▽決勝

大阪 11（4－2、7－5）7 愛知

○……前半はお互いに固さがのぞき20分2－2のロウスコアだったが、大阪は21分繰井、24分山本と二本のスカイプレーを鮮やかに決め余裕を得た。

得	【大阪】		【愛知】	得
0	岡田	GK	服部	0
0	奥野	GK	溝口	0
1	山本	FP（審・山内、斉藤和）	鈴木	3
3	繰井		中島	3
0	奥田		伊藤	1
5	吉見		蟹江	0
0	源野		隠岐	0
0	河内		榊原	0
1	志賀		坂元	0
1	金岡		鬼頭	0
0	脇		田中	0
11	（1）	7MT	（0）	7

後半はうってかわって激しい射ちあいとなったが、先行する大阪は10分すぎ、さらに点を積みあげて8－4。このあと愛知は猛反撃に転じ鈴木、中島、伊藤の3ゴールで1点差とせまったが、大阪も21分吉見23分金岡で突きはなし、栄冠を手にした。大阪は、左腕2人を揃えた布陣が勝因といえる。愛知の中島（桜台2年）は、3年前の第1回全国中学生大会で活躍した選手、成長している。（徳前）

高校女子（10チーム）

広島、富山の追撃かわす

▽1回戦（2試合）

広島（選抜）11（6－5、5－5）10 富山（選抜）

秋田（和洋女）12（4－5、8－4）9 鹿児島（国分実業）

▽準々決勝

大阪（全大阪）10（5－1、5－1）2 広島

東京（選抜）11（6－2，5－4）6 北海道（函館女商）
茨城（水海道二）6（3－2，3－2）4 静岡（清水市商）
愛媛（新居浜商）6（1－1，5－3）4 秋田

○……広島×富山は七たび同点のあと広島が2点をあげ11－9とリード、残り時間は7分あり、もう一波乱かとみられたが、富山は13分1点を返しただけで、以後は両軍GKが美技を応酬、広島の辛勝となった。

秋田×鹿児島は押され気味の秋田が後半10分から見違えるような動きを示し逆転勝ち。

その秋田も愛媛戦は、逆に終盤愛媛の巧妙な攻撃にあって、崩された。

大阪、手固いディフェンス

▽準決勝

大阪 10（6－2，4－0）2 東京

○……重苦しい空気がほぐれたのは、1分40秒東京・奥富の左サイドからのシュートが決まってからだ。前半の流れとしては、東京がボールをよく廻しながらも、大阪の固い守りにあってポストに通じさせることができず、また、ロングシュートもゴールを突き破るだけの力がなく、大阪の反撃を食うハメになった。

後半は、いっそう力の差があらわれ、大阪はエース池渕が力強いプレーで全得点をあげる活躍と、手固いディフェンスで東京を振り切った。（岡村）

得	【大阪（選抜）】		【東京】	得
0	中田（大谷）	GK	斉藤（小平）	0
0	石若（大王寺）	GK	五十嵐（都五商）	0
0	渡辺（大谷）	FP	大山（小平）	0
2	今井（大谷）	FP	中村（都二商）	0
0	横山（大谷）	FP	嶋村（都二商）	0
7	池渕（大谷）	FP	宮田（小平）	0
0	木村（大女短大付）	FP	松田（小平）	1
0	岡村（門真）	FP	奥富（小平）	1
0	田辺（摂津）	FP	大山（小平）	0
1	松井（大谷）	FP	羽尾（小平）	0
0	辰己（大谷）	FP	西本（都五商）	0
10	（0）	7MT（審・都梅・鈴木）	（0）	2

茨城 5（2－3，3－1）4 愛媛

得	【茨城】		【愛媛】	得
0	倉持	GK	秦（ひ）	0
0	広瀬貞	GK	近藤	0
0	高野	FP	杉下	0
2	黒川	FP	河野	3
1	坂巻	FP	矢野	0
0	中沢	FP	加藤	0
0	広瀬美	FP	秦（祐）	0
1	須藤	FP	宮川	0
0	金長	FP	宮木	1
0	佐藤	FP	福田	0
1	石塚	FP	尾嶠	0
5	（2）	7MT（審・勝 岡村）	（2）	0

○……会場の体育館は茨城・水海道二高のホームコート。超満員の観衆は、もちろん茨城へ声援だ。

その中で愛媛はセット、速攻ともきびきび動き、茨城ディフェンスから7MTを誘って12分3－1とリードした。

茨城は14分の7MTで1点差に迫ったあと、後半1分須藤で同点4分7MT（坂巻）で待望の逆転を遂げた。

しかし、愛媛も8分宮本のゴールで再び互角とし、その後は緊張の攻防となったが16分茨城は黒川が貴重なシュートを決め、勝ちこした。愛媛は、終了1分前、同点とすべき7MTを落とし涙をのんだ。好試合だった。（佐野和夫）

地力の差、愛媛、東京制す

▽3位決定戦

愛媛 13（4－2，9－4）6 東京

茨城、あと一息及ばず

▽決勝

大阪 5（3－1，2－3）4 茨城

補	得	【大阪】		【茨城】	得	補
0	0	中田	GK	倉持	0	0
0	0	石若	GK	広瀬貞	0	0
0	0	渡辺	FP	高野	0	0
1	0	今井	FP	黒川	1	0
0	0	横山	FP	坂巻	0	0
0	4	池渕	FP	中沢	0	0
0	1	木村	FP	広瀬美	1	1
0	0	岡村	FP	須藤	1	0
0	0	田辺	FP	金長	0	0
0	0	松井	FP	佐藤	1	0
0	0	辰己	FP	石塚	0	2
1	5	（1）	7MT（審・徳前・三枝）	（0）	4	3

［注］テーブル中の「補」は本誌調べによるアシスト数。

○……茨城の追いあげで、コートを取り巻く三千近い観衆の熱狂ぶりは最高潮。残り9分で4－5と1点の負担は追う茨城にとって、はね返せないものではなかったハズだ。

しかし、マイボールになると、どっとあがる歓声に気負いすぎ、射ち急ぎから再三の好機を逸した。地元の声援が裏目に出た、といったら酷であろうか。

大阪は前半、ゴール前FTから得点をあげ、守ってはGK中田がすばらしいプレーをみせた。だが後半、茨城の奮起にあって、11分3－3と苦しみ、不安をのぞかせた。ここで相手に反則退場があり、12分エース池渕がすかさずポイント、5分7MT（木村）で優位をキープしたのが大きい（杉山）

○……高校男子決勝が済むと、本部席の嶋田、清水両日本協会理事は、どちらからともなく「無事終りましたね」と声をかけあった。

来年からはもう見られぬ〝高校の部〟。高体連副部長のポストにある両氏にとって今大会は一つの節目（ふしめ）でもあったのだ。

補助員の女子高校生が、おしぼりをさしだしながら「ご苦労さまでした」と一言。彼女たちは、事情を知っての言葉ではなかったのだろうが、なんとも印象的。

★天皇杯（男女総合得点）順位①大阪②茨城③愛知④東京⑤三重⑥山口⑦北海道・静岡

★皇后杯（女子総合得点）順位①茨城②東京③大阪④愛媛・熊本⑥三重⑦北海道・秋田・栃木・静岡・京都・広島・山口

熱狂の地元、新生国体へ歩み

▽……水海道駅（関東鉄道）から会場の水海道一高までおよそ1キロの道に人の列がつづく。

第4日、茨城勢が3部門の決勝へ駒を進め、しかも、ご当所水海道二高（高校女子）の進出は、いやがうえにも、国体ムードを盛りあげた。

なんども国体へ来ている日本協会役員も、今回ほど、市(まち)とハンドボールが結びついている例を知らない、となった。

▽……ここまでハンドボールが地についているのは、水海道二高の全国的活躍があったからだ。

昭和30年の第7回全日本総合優勝にはじまって、32、45年のインターハイ優勝、33、36年の国体優勝……。そのつど、市民総出の凱旋パレードが行われ、市の誇りになっていった。

その二高が、地元で勝ち進んだのだから、まちぢゅうが熱くなったのもムリはないのである。

▽……曲り角に来たといわれる国体、来年からは年令別を採るほか簡素で実のある国体への〝変身〟が企られている。

いろいろな意味で、今年は「最後の大会」だ、といわれていたがハンドボール界にとっても、これほど熱気にあふれた国体は、絶後といってよいだろう。

▽……もちろん民宿の成功は、過去にも例はあるし、いわゆるホームコートの熱狂は、38年の山口国体で、徳山高が男女優勝という快挙を遂げた時にもみられたのだがそれらのケースとは、なにかひとあじちがった高まりが、水海道にはあったのである。

日本協会・荒川清美理事長は「地域社会と結びつかなくてはこれからのスポーツは育っていかない。水海道とハンドボールは、その素晴しいサンプルだ」と、明解に説く。

▽……国体の前途は厳しい。51年に予定される佐賀国体は、住民の反対運動が強く、日本体協などは異例の現地視察を行うことにしているし、国体への風当りは強くなっても、弱まりはしないだろう、というのが消息通のみかたである

たしかに、これまでの国体は華美に過ぎた面があるし、必要以上にお金をかけた面も少くない。

終ったあと、いったい何が残るのだろう、と人ごとながら気になった時もある。

▽……得点争いがこうじて、国体開催地を転々と渡り歩く選手が生まれ、突然、有力実業団の〝支社〟が開設されたりする弊害で国体の参加規程はがんじがらめにされてしまった。これなどは、当事者が自からの祭典を汚したに等しい。

▽……地元民不在の国体がようやく反省の姿勢を示した時、茨城・水海道大会が市民の声援に支えられて開かれ、多くの感動を残しながら三重・四日市大会へとバトンタッチしたのはハンドボール関係者にとってきわめて意義のあることだろう。

「見て下さいよ、この観衆。ぼくらもプレーするのが楽しくなります」――歴戦の勇者、木野実選手（大阪・湧永薬品）が嬉しそうに指さしたその先には、スポーツを支える〝まごころ〟が、いくえにも重なりあって6面のコートを囲んでいた。

ハンドボール界は、水海道市によって他よりも1年早く〝新生国体〟のステップを踏み出せたといってよいだろう。（杉）

佐々木敏雄さん亡くなる
兄弟レフェリー悲しい解散

日本はもとより外国でもあまり例がないといわれていた兄弟レフェリー・佐々木兄弟（岩手協会）の弟敏雄さん＝写真＝が、この夏旅行先で亡くなられたことが判り生前を惜しむ声があがっている。



茨城国体の審判員として来た兄の茂喜さんは、会う人ごとに「弟さんは元気ですか、今度はなぜ一人で?」とたずねられ、敏雄さんが今夏8月7日岩手県種市町へ旅行した際、心臓発作から34年の人生を閉じた悲しい知らせを伝えていた。

佐々木兄弟は、いわゆるハンドボールの虫、特に敏雄さんは盛岡商高－盛岡市役所とつねに主将をつとめ、現役を退いてからはレフェリー、44年からの復審制採用で茂喜さんとの異色ペアが生まれた

ピタリと呼吸のあったレフェリングは岩手国体や、全日本総合でも一際目立ち、球界の〝名物的存在〟になっていたもので、会場に集っていたレフェリー団は、早速ご霊前を集め、敏雄さんのめい福を祈った。茂喜さんは「これからは弟のぶんまで頑張って、信頼のあるレフェリーになるためいっそう努力します」と、笛を片手に新しいパートナーとグランドへとび出していった

各地の記録

湧永薬品、危気なく4連勝　丸善石油2位に

第4回近畿実業団選手権は10月28日から11月8日までの4日間、大阪・東淀川体育館に3県9チームが参加して開かれた(男子のみ)

前年優勝の湧永薬品（大阪）は特別シードされ、準決勝から出場したがやはり圧倒的な強味をみせ丸善石油(和歌山)、大山商会（大阪）など有力チームを難なく降し4年連続優勝を遂げた。

▽1回戦（1試合）
鐘渕化学（兵庫） 20（6－9、14－8）17 美津濃（大阪）

▽2回戦
丸善石油(和歌山) 47（26－4、21－1）5 三井造船（大阪）
川崎重工（兵庫） 21（9－7、12－4）11 鐘渕化学

▽3回戦
大山商会（大阪） 21（8－10、13－10）20 川崎重工
丸善石油 35（17－8、18－7）15 大阪ガス（大阪）

▽準決勝
丸善石油 20（11－8、9－7）15 神戸製鋼（兵庫）
湧永薬品（大阪） 32（17－7、15－9）16 大山商会

▽7位決定戦（2回戦敗者）
鐘渕化学 25――17 三井造船

▽5位決定戦（3回戦敗者）
大阪ガス 26――24 川崎重工

▽3位決定戦
大山商会 19（8－6、11－7）13 神戸製鋼

▽決勝
湧永薬品 25（10－11、15－8）19 丸善石油

三景、法大破り初優勝
女子も日本ビクター初

国内唯一のオープントーナメント・第12回東京都選手権は11月2日から10日までの5日間、東京重機体育館などに、男子36、女子12チームが参加して行われた。

男女とも、上位戦は全日本総合（12月、東京）の前哨戦ともいえ注目されたが、男子は三景×法政大の実業団、学生の雄が決勝で対決。三景が、法政大の激しい追いこみをかわし初優勝、女子は、東京重機×日本ビクター(茨城)と茨城国体決勝の再現となり、日本ビクターが初優勝を飾った。

男子で三陽商会、女子で学習院短大が姿を見せ、コートサイドの話題を集めた。

▽男子3回戦
三　景 23――10 S・D・P
東京教大 24――16 府中ク
全日体 19――18 日体大
中央大 21――13 三陽商会
セントポール21――13 サン・ク
東京教員 11――8 大崎電気
ジューキク27――5 Y・M・C
法政大 25――15 神代ク

▽同準々決勝
三　景 24――18 東京教大
中央大 22――16 全日体
東京教員 22――13 セントポール
法政大 25――14 ジューキク

▽同準決勝
三　景 20（12－9、8－6）15 中央大
法政大 25（15－4、10－16）20 東京教員

▽同3位決定戦
中央大 25――21 東京教員

▽同決勝
三　景 17（6－11、11－5）16 法政大

▽女子準々決勝
東女体大 11（延）10 東京学芸大
東京重機 11――7 日体大
大崎電気 7――5 日立栃木
日本ビクター19――10 ビクタ球友会

▽同準決勝
東京重機 13（8－2、5－4）6 東女体大
日本ビクター 11（4－4、7－4）8 大崎電気

▽同3位決定戦
大崎電気 13――8 東京女体大

▽同決勝
日本ビクター 11（8－4、3－4）8 東京重機

(注)オープントーナメントとは他府県からの出場も認める大会。

蒲郡ク、2度目の栄冠
女子は静岡城北ク勝つ

第5回東海クラブ選手権は、10月13、27日の両日静岡で行われ、男子16、女子2チームが参加した

男子は、地元勢がベスト4のうち三つを占める活躍を見せたが、秀れた攻撃力をもつ蒲郡ク(愛知)が、名門・清商ク、2連勝を狙う静農ク（ともに静岡）を連破、2年ぶり2度目の優勝をはたした。

女子は、静岡城北ク×名古屋ク（愛知）の顔合せとなり、城北クが接戦にせり勝ち初優勝した。

▽男子1回戦
爽風会（三重） 20――14 浜南ク（静岡）
富士ク（静岡） 20――7 名大ク（愛知）
佐々木会（愛知） 不戦勝 天竜ク（静岡）
蒲郡ク（愛知） 42――7 NKKク（静岡）
星雲ク（愛知） 不戦勝 御殿場ク（静岡）
岐阜西ク（岐阜） 21――18 蒲原ク（静岡）

▽同準々決勝
静農ク（静岡） 27――16 佐々木会
富士ク 18――17 爽風会
蒲郡ク 28――11 岐阜西ク
清商ク（静岡） 20――6 星雲ク

▽同準決勝
静農ク 17――11 富士ク
蒲郡ク 22――14 清商ク

▽同決勝
蒲郡ク 14――11 静農ク

▽女子決勝
静岡城北ク(静岡) 6――5 名古屋ク（愛知）

近畿は京都ク3連勝

第5回近畿クラブ選手権（男子のみ）は、11月4日大阪・千島体育館に4府県の代表が集り行われ京都クが3連勝した。

▽1回戦（2試合）
磯骨ク（大阪） 17（7－8、10－7）15 奈良ク（奈良）
京都ク（京都） 21（10－7、11－8）15 垂水ク（兵庫）

▽決勝
京都ク 17（9－6、8－7）13 磯骨ク

下総教育航空群が優勝

海上自衛隊のハンドボール普及は、あいかわらず目覚しいものがあるが、そのなかでも41年に第1回大会（山口）を開いた「教育航空集団大会」は歴史、技術とも抜きんでたものがある。

8回目にあたる今年の大会は10月15、16日の両日千葉・下総航空基地に教育航空集団れい下の各教育航空群4チームが集り、リーグ戦で行われた結果、平野（オリンピック候補）を切り札にもつ地元下総教育航空群が優勝した。

下　総（千葉） 21（13－6、8－1）7 小　月（山口）
徳　島（徳島） 14（7－7、7－4）11 鹿　屋（鹿児島）

小月 13（6―6、7―6）12 鹿屋
下総 17（11―2、6―1）3 徳島
小月 10（3―5、7―3）8 徳島
下総 22（11―5、11―3）8 鹿屋
【順位】①下総②小月③徳島④鹿屋

氷見、有磯が大勝

▼富山県秋季高校選手権（11月・二上・工高）
▽男子準々決勝
日大高岡 24―5 富山
氷見 15―3 富山東
二上 17―2 富山商専
高岡商 9―7 伏木
▽同準決勝
氷見 11―8 日大高岡
高岡商 17（延・分）17 二上
7MTコンテストで高岡商の勝
▽同決勝
氷見 23（13―5、10―10）5 高岡商
▽女子準々決勝
有磯 8―7 小杉
高岡女 18―4 高岡商
富山北 5―3 高岡
富山女 12―2 清光
▽同準決勝
有磯 5―2 高岡女
富山北 7（延）4 富山女
▽同決勝
有磯 17（10―0、7―1）1 富山北

女子は麻生高OG制す

▼第24回茨城県総合選手権（11月・鉾田一高）
▽男子準々決勝
コンドルズ 21―16 茨苑ク
麻生高 15―3 土浦三OB
麻生ク 棄権 茨城日立
自衛隊勝田 17―9 茨城大
▽同準決勝
コンドルズ 15―11 麻生高
自衛隊勝田 18―9 麻生ク
▽同3位決定戦
麻生ク 12―8 麻生高
▽同決勝
コンドルズ 23（12―12、11―8）20 自衛隊勝田
▽女子準々決勝
水海道二高 11―7 麻生高
鉾田二高 7―5 石岡二高
笠間高 10―2 高萩高
麻生高OG 10（延）7 結城二高
▽同準決勝
水海道二高 13―4 鉾田二高
麻生高OG 10―6 笠間高
▽同3位決定戦
鉾田二高 7（分）7 笠間高
▽同決勝
麻生高OG 5（3―1、2―3）4 水海道二高
（注）日本ビクターは不出場

男女とも新進目立つ

▼第17回滋賀県秋季高校総体ハンドボール競技（11月・八幡商）
▽男子予選リーグA組順位①八幡工②彦根東③能登川・彦根工⑤近江
▽同B組順位①安曇川②米原③高島④彦根西⑤長浜商工
▽同決勝トーナメント1回戦
彦根東 14―9 安曇川
八幡工 11―9 米原
▽同決勝
彦根東 14（6―3、8―0）3 八幡工
▽女子予選リーグA組順位①守山女②愛知③彦根東④安曇川⑤能登川⑥彦根南
▽同B組順位①彦根西②米原③高島④大商⑤八幡商
▽同決勝トーナメント1回戦
守山女 18―3 米原
愛知 8―5 彦根西
▽同決勝
守山女 6―5 愛知

夙川学院、北条に逆転勝ち

▼兵庫県高校新人大会（11月、夙川学院）
▽県中央大会・男子準々決勝
武庫工 27―6 柏原
明石南 14―5 県兵庫
私・神港 10―6 鈴蘭台
報徳 19―18 西宮北
▽同準決勝
武庫工 10（延・分）10 明石南
抽せんで武庫工の勝ち
報徳 21―13 私・神港
▽同3位決定戦
明石南 11―9 私・神港
▽同決勝
武庫工 17（7―4、10―7）11 報徳
▽同女子準々決勝
明石商 11―9 市・神港
北条 12―6 鈴蘭台
夙川学院 14―5 近大豊岡
甲子園 5―3 県神戸商
▽同準決勝
北条 10―8 明石商
夙川学院 3―1 甲子園
▽同3位決定戦
明石商 6（延・分）6 甲子園
抽せんで明石商が3位
▽同決勝
夙川学院 13（9―2、4―5）7 北条

一般は辛くもスワロー兵庫

▼兵庫県秋季一般選手権（11月・西宮市立市民体育館）＝男子のみ
▽準々決勝
甲南大B 13―12 兵庫ダイハツ
スワロー兵庫 13（分）13 神戸製鋼B
抽せんでスワロー兵庫の勝ち
神戸製鋼 16―6 鐘淵化学
川崎重工 23―11 スワロー兵庫B
▽準決勝
スワロー兵庫 21―17 甲南大B
川崎重工 13―9 神戸製鋼
▽決勝
スワロー兵庫 17（6―10、11―7）17 川崎重工
引き分け
抽せんでスワロー兵庫の優勝

Aクラスは碓骨ク

▼大阪男子クラブ選手権（10月・大阪市中央体育館）
▽A級準々決勝
都島工ク 15―10 城東ク
碓骨ク 棄権 鶴見ク
雪陵ク 21―14 北陽ク
レインボー 18―15 佐野工ク
▽同準決勝
都島工ク 20―15 雪陵ク
碓骨ク 21―12 レインボー
▽同決勝
碓骨ク 12（5―6、7―5）11 都島工ク
▽Cクラス準決勝
八尾ク 21―11 上宮ク
たかつク 24―8 千里ク
▽同決勝
八尾ク 14―9 たかつク

三春台ク敗れる波乱

▼神奈川県一般秋季選手権（11月・横浜東高）＝男子のみ
▽準々決勝
三春台ク 33―12 神工ク
神奈川教員 30―24 相友ク
日本発条 24―10 横浜商工ク
セントラル自動車 20―12 関東学院大
▽準決勝
神奈川教員 18―17 三春台ク
日本発条 10―9 セントラル自動車
▽決勝
日本発条 25（13―11、12―4）15 神奈川教員

大同製鋼15度目の優勝

▼第31回愛知県実業団リーグ（9月・名古屋市体育館）＝女子は既報。

▽1部

大同星崎 29—11 日本碍子

新日鉄名古屋 19—11 トヨタ自工

トヨタ車体 23—6 トヨタ自工

大同星崎 17—16 トヨタ車体

大同製鋼 28—19 新日鉄名古屋

新日鉄名古屋 22—16 日本碍子

トヨタ車体 36—16 日本碍子

大同星崎 24—10 トヨタ自工

トヨタ車体 26—15 新日鉄名古屋

大同製鋼 25—18 日本碍子

大同製鋼 22—10 トヨタ自工

大同星崎 16—13 新日鉄名古屋

日本碍子 26—16 トヨタ自工

大同製鋼 25—21 大同星崎

大同製鋼 31—13 トヨタ車体

【順位】①大同製鋼5戦全勝（＝14回連続優勝・通算15度目）②大同星崎4勝1敗③トヨタ車体3勝2敗④新日鉄名古屋⑤日本碍子⑥トヨタ自工

▽2部7～8位決定戦

三菱重工 29—7 トーメン

▽同5～6位決定戦

豊田織機 15—13 中部電力

▽同3～4位決定戦

ブラザー工業 15—9 アイシン精機

▽同1～2位決定戦

パイロット 18—16 豊田工機

▽1・2部入れ替え戦

トヨタ自工（1部） 21—15 パイロット（2部）

女子は三本木が快勝

▼第24回青森県高校秋季選手権（10月・三本木）

▽男子準々決勝

青森商 9—8 七戸

弘前南 12—5 青森

鰺ケ沢 14—5 野辺地

三本木 26—8 板柳

▽同準決勝

弘前南 12—8 青森商

三本木 13—7 鰺ケ沢

▽同決勝

弘前南 14（7—7／7—5）12 三本木

▽女子1回戦（1試合）

三本木 8—3 野辺地

▽同準決勝

三本木 17—1 鰺ケ沢

七戸 5—4 青森西

▽同決勝

三本木 8（4—2／4—2）4 七戸

岡山教員、岡山大制す

▼岡山県一般男子秋季選手権（10月・津山高専）

▽1回戦（3試合）

岡山大 16—5 川崎製鉄

津山工OB 11—4 津山高専

岡山教員 20—9 金川七曲会

▽準決勝

岡山大 10—6 児島柏会

岡山教員 17—7 津山工OB

▽決勝

岡山教員 20（10—4／10—6）10 岡山大

中学大会記録

◇広島・第23回県中学校総体（10月・呉三河中）＝男子のみ参加8

▽準々決勝

東畑 不戦勝 修道

二河 11—2 廿日市

城北 10—9 警固屋

呉長浜 19—10 神辺

▽準決勝

二河 6—2 東畑

呉長浜 14—5 城北

▽決勝

呉長浜 14（6—1／8—1）2 二河

「各地の記録」への投稿を歓迎します。用紙自由、ただし原文を短かくする場合があります。

投書欄・明日への提言

設けよフェアプレー賞

今春の世界選手権で7MT、反則退場などがもっとも少ない国に「フェアプレー賞」が贈られたそうだが、日本でもこうした表彰を考えてみたらどうでしょう。

関東学生などを見ていると、相手の速攻を、反則などで止めると、そのチームのベンチが賞讃しているような風景さえあります。反則はしてはいけないもの、という意識が、年を追って低下しているように感じるのです。

反則が多いのは、レフェリーにも一因がある、とよく云われますが、私はそうではないと思います。すべて、プレイヤーの責任です。反則を告げるホイッスルで寸断されるゲームは、ハンドボールの人気を下げます。

フェアなチームに対する賞はこうした悪傾向にくさびを打つ役割を果すでしょう。

最近、個人賞の設定が目立っていますが、むしろ私はこうしたチーム表彰こそ、ハンドボールにはふさわしいと思うのです。

また、同じような反則の繰り返しも、目に余るものがあり、このような場合、そのチームの主将に警告、退場を課すようなルール（または申し合せ）を研究して欲しいと提案するものであります。

【東京・小川清一・会社員】

★編集後記

◇……全日本学連が12年ぶり2度目のユニバシアード（世界学生選手権）出場を決めました。

全日本実連も独自のヨーロッパ遠征を検討中と聞いていますが、さまざまな制限がある日本協会（ナショナルチーム）の国際交流とは別に、加盟団体や組織が、意欲的に〝海外雄飛〟を試みる姿勢は嬉しいことです。

◇……世界選手権のグループ制、IHFの会願がようやくかなった、といえるニュースですが、その背景には、加盟国が63にも増えた〝発展〟があります。

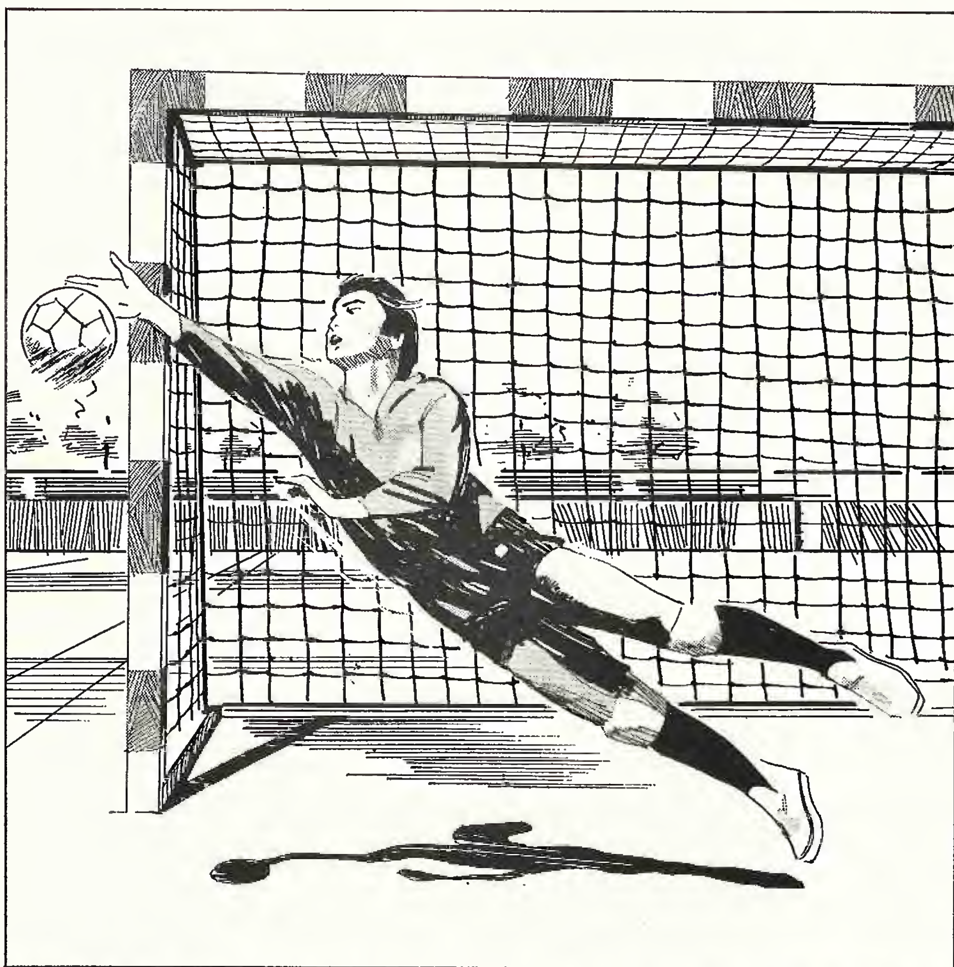
世界のハンドボールはますます大きくなりますが、日本にとって、それだけ厳しさが増すわけです。

◇……関東学生、国体両大会の女子決勝で、本誌としては二度目の、アシスト（得点補助者）のノートを試みてみました。ゴールゲッターに直接パスを渡した者、という基準ですが、いかがなものでしょう。

◇……関東学連委員諸君の協力で、インカレの記事を間に合わせることができました。

大会が終ると、すぐ本誌のことを思って下さるかたが増えています。有難いことです。

◇……次号は来年2月です。よい年をお迎え下さい。（S）



日本ハンドボール協会編『ハンドボール』第一二六号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
昭和四十九年十一月二十五日印刷 昭和四十九年十二月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南一-一-一
電話 大代表(467)三一二一
振替 東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価二百五十円(一年間講読料三千三百円)